淑徳大学地域連携センター

年報 Vol.3

2019年

CONTENTS

巻頭言

「安きに居て危きを思う」ことの大切さ

…… 淑徳大学地域連携センター長 矢尾板俊平

研究ノート

Ⅰ. 研究ノート

2018年度淑徳大学 経営学部 観光経営学科 岩村2年・3年ゼミと横瀬町 果樹公園あしがくぼ道の駅との連携事業の報告

…… 岩村沢也

飲料メーカーおよび近隣スーパーとの協働によるPBL ーキリン「午後の紅茶」広告POPコンテストを通じての地域参加ー

…… 杉原麻美

淑徳大生の板橋区赤塚支所・都市農業係と連携した 「農業体験」による気づき・学び

…… 土井 進

報告

Ⅱ.報告

介護人材の確保・定着の促進

一介護ロボット活用状況調査と千葉介護ロボットフォーラム報告書一

…… 藤野達也

活動報告

- Ⅲ. 2018年度地域連携センター 事業報告
 - I. 大学地域連携センターの取り組み
 - Ⅱ. 各キャンパスでの取り組み
 - Ⅲ. 受託事業

目 次

登 與言			
「安きに居て危きを思う」ことの大切さ 淑徳大学地域連携センター長	矢尾机	反俊平	1
I. 研究ノート			
2018年度淑徳大学 経営学部 観光経営学科 岩村2年・3年ゼミと			
横瀬町 果樹公園あしがくぼ道の駅との連携事業の報告	岩村	沢也	3
飲料メーカーおよび近隣スーパーとの協働による PBL			
―キリン「午後の紅茶」広告 POP コンテストを通じての地域参加― ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	杉原	麻美	19
淑徳大生の板橋区赤塚支所・都市農業係と連携した「農業体験」による			
気づき・学び	土井	進	27
Ⅱ. 報告			
介護人材の確保・定着の促進			
—介護ロボット活用状況調査と千葉介護ロボットフォーラム報告書 - ······	藤野	達也	34
Ⅲ.活動報告			
2018年度地域連携センター 事業報告			38

「安きに居て危きを思う」ことの大切さ

淑徳大学地域連携センター長 矢尾板 俊 平

淑徳大学地域連携センター年報第3号が発刊されました。本号には、2018年度の本学の地域連携、社会連携の取組内容が取りまとめられています。また、4本の研究ノートや報告もご寄稿いただきました。心より感謝申し上げます。

大学地域連携センターも開設から3年が経過し、多くの皆様のご支援、ご協力を賜りながら、千葉市、酒々井町、八潮市との包括連携協定の締結、ちば産学官連携プラットフォームの設立、また産業界等との連携など、本学の地域連携、社会連携事業の充実に努めてまいりました。来年度も、引き続き、地域連携・社会連携事業を推進してまいりたいと思います。

唐代の古典に「貞観政要」という書物があります。本書は、唐の太宗と皇帝を補佐した名臣たちとの政治問答集であり、その内容は、現代においても非常に示唆に富む「帝王学」の教科書とも言われてます。

その中に「安きに居て危きを思う」という言葉があります。その一節に少し触れてみましょう。

太宗は側近に「天下を守ること難きや易きや」という問います。それに対して、側近の魏徴は「甚だ難し」と答えます。太宗は「有能な人材を登用して、意見を聞きけば良いのではないか。なぜ難しいものと言うのか」と、さらに問うと、魏徴は、次のように答えました。

「これまでの帝王を見ますと、国に憂いがあり、危うい間は、有能な人材を登用し、その意見を聞きます。しかし、安泰した後は、必ず寛怠が生じます。そうすると、意見を言う者も、恐懼し、意見を言わなくなります。それにより、国は危機を迎えるのです。昔からの聖人が安きに居て危きを思うのは、このためです。安泰しても、心を引き締めなければなりません。これが難しいものと言う理由です。」

順調に物事が進んでいるときこそ、緊張感を持ち、事に当たる必要があります。また、安泰なときは、次なる 危機を迎えるための準備をしておくべき時期でもあります。また、次なる成長や発展のための準備の時期でもあ ります。一度、危機が生じてしまえば、その危機への対応に集中をしなければいけなくなるかもしれません。だ からこそ、平時の行動が重要なのだと思います。「危機管理」とは、危機の時の対応ではなく、平時から断続的 に続くマネジメント活動なのです。

また「貞観政要」には、「大事はみな小事より起こる」という言葉もあります。そして、「危機は連鎖して生じる」とも言えると思います。小さな「ほころび」が小さな危機の連鎖を生み、やがて大きな危機となっていきます。その大きな危機を生じさせないためには、最初の「小さなほころび」に対処するとともに、連鎖していく「小さな危機」に対応していくことが重要なのだろうと思います。

地域連携や社会連携の要諦は、他者との信頼関係です。信頼関係は構築することは大変難しいものですが、崩壊する時は一瞬です。だからこそ、日々の活動の中において、緊張感を持ち、取り組みを進めていくことが大切であると思います。

引き続き、大学地域連携センターの事業にご支援、ご協力を賜りますよう、なにとぞ、よろしくお願い申し上げます。

2019年3月

研究ノート

2018年度淑徳大学 経営学部 観光経営学科 岩村2年・3年ゼミと 横瀬町 果樹公園あしがくぼ道の駅との連携事業の報告

岩村沢也1

要約

本報告は、2018(平成30)年度に、経営学部観光経営学科岩村ゼミが行った埼玉県横瀬町にある「果 樹公園あしがくぼ道の駅」と大学との連携事業の報告である。

本報告では、2018年度の活動概容、調査研究結果と横瀬町への提案をまとめ、最後に学生への教育効果を振り返る。

当該の道の駅が、鉄道の駅に隣接しており、登山客の利用も多いこと、また秩父地方の自動車観光における玄関口となっており、週末にはオーバーユースになっている現状を、利用者アンケート調査から把握し、長期的には、自動車観光から鉄道観光への道を探るべく、また「歩く観光地」としての横瀬町の可能性を追求すべく、山道や巡礼路の整備の提案や標識の整備を提案した。本報告の後半では、学生が集団学習・外部プレゼンテーションによって学べること、新たに開発できる経験知についてまとめた。

横瀬町の道の駅と淑徳大学経営学部の連携事業は、すでに4年目に入っている。初年度は、あしがくぼ氷柱祭り期間中の冬のキャンドルサービス・イベント開催、次の2年は道の駅の商品開発(ロシアンティ、紅茶クッキー)とSNSによるメディア広報の可能性を探る事業であった。2018年度からは、岩村ゼミが連携事業を担当することになったが、岩村は、「道の駅」と周辺の「道」との関係をテーマにしようと考えた。

本報告では、今年度の連携事業概要と年間の活動内容、学生の調査研究の報告と横瀬町への提案をまとめ、最後に学生への教育効果を振り返る。

2018 (平成30) 年度の連携事業 (調査研究) 内容

本年度は、岩村ゼミが初めて担当することになったが、教員・学生とも現地の地理に不慣れなため、道の駅の利用実態の把握と横瀬町の空間把握(地理理解)に務めることに集中し、以下のような活動を行った。 1.6月・11月・12月に3回「道の駅利用者アンケー

6月・11月・12月に3回 | 道の駅利用者アンケート(日時とサンプリング数を事前に決めて実施)」を行い、その結果を分析、道の駅に報告した。

- 2. 横瀬町の各所を、学生は日時を分けて分担して歩き、お互いに報告した。ハイキング用登山道、秩父巡礼路、林道、町道を歩き、気がついたことを記録・分析。道の駅との関連を考察した。
- 3.「里山まるマルシェ(芦ヶ久保地区)(5月)」「新茶祭り(道の駅内)(6月)」「寺坂棚田ホタルかがり火祭り(7月)」「あしがくぼの氷柱(1月中旬)」に分担して参加、事業の概観を捉え、学生目線で評価した。

全体としては横瀬町の「道」をテーマに、「道」に 関わる状況を観て回り、考察した。

報告会では、横瀬町の「道」と「道の駅」の特徴、 人の流れ、そして今後の観光客の誘導の方法や、「道」 に関して改善すべき「表示」「内容」について提案した。

「果樹公園あしがくぼ道の駅」利用者アンケート 調査の分析

以下は、6月・11月・12月の日曜日の12:00~14:00の最繁忙時に時間を設定して、毎回調査票回収100枚を目標に、道の駅の利用者を対象に行ったアンケート調査結果である。直接面接調査で行った。

なお、集計表の数字の提示は、本報告では、紙面の 都合上割愛する。

アンケート調査で分かったこと:果樹公園あし がくぼ道の駅の特徴

- ・飯能方面から国道299号線をのぼった秩父盆地の入り口にある道の駅。
- ・ドライバーにとっては、東吾野のファミマから約 20kmコンビニがないために、秩父盆地に入る前の 絶好のトイレ休憩地となっている。
- ・鉄道を使う登山者・ハイカーにとっても、食糧補給 基地・帰宅前の休憩所・秩父土産物の購入場所に なっている。
- ・シャワー室がある。
- ・バイク・ツーリストが集合地・休憩地としてよく使 う。店の閉店後も集合地ともなっている(屋外喫煙 所もある)。駐車場で情報交換・交流をしている。
- ・食堂・売店等の営業時間延長を求める利用客が多い。
- ・道の駅近くには、(二子山、日向山、山の花道、丸山、県民の森等への) ハイキングコースが多い。
- ・一部のハイカーは、帰りの電車の運行頻度が高いので、バスで名栗方面から入り、二子山または武甲山登山をして、
 売ヶ久保に降りるというコースを取る。
- ・道の駅には、バーベキュー広場、川遊びの場所、楽 焼き・陶芸教室、蕎麦打ち教室などの体験が楽しめ る。しかし、利用客は少ない(あまり知られていない)。
- ・道の駅からの果樹公園や川の景観が良い。
- ・テラスで、果樹公園村や川の風景・風を感じながら スイーツを食べ、リラックスできる環境が秀逸である。
- ・食堂では「わらじかつ丼」「味噌カツ丼」「ずりあげ うどん」「そば」等秩父名物の食事が一通り揃って おり、一定の評価を得ている。
- ・道の駅そのものをデスティネーションとしてやって くる観光客もいる。
- ・日向山方面から下山路で、
 声ヶ久保駅に西武線の電車が出入りする姿を見るのは楽しい。
- ・駅には上下線とも30分毎に電車が来るので、鉄道利 用者にとっては、安心感がある。
- ・道の駅の売り場は小さいが、地元の農作物は常に補 給されており、営業時間中に完全に売り切れになる ことは少ないようだ。
- ・道の駅とその周辺で「里山まるマルシェ」「新茶ま

- つり」「新そばまつり」「あしがくぼの氷柱」等のイベントを年間を通して何回か行っており、利用客に「道の駅」と声ヶ久保果樹公園村の知名度を上げる努力をしている。西武鉄道もイベント広報をしている。行政・鉄道会社・ブコーさん案内所・地元農家・地元住民・立教大学で協働の体勢ができあがっているのは注目する。
- ・西部秩父線のほとんどの駅では、ここ20年で、乗降客がおよそ半減しているが、近年終点の西武秩父駅、横瀬町にある芦ヶ久保駅と横瀬駅では乗降客が増加している。芦ヶ久保駅では、冬の「氷柱」やレストラン列車の停車等で、道の駅を利用する客がいること、横瀬駅では春の羊山公園の「芝桜まつり」や、横瀬電車区での鉄道イベント等で駅を利用する人が増えたと考えられる。また、特急停車駅なので、地元の人で都心に通勤・通学する人もいる。淑徳の学生も一人駅前に住んでいる。

道の駅とその周辺の課題と改善提案

- ・土曜日・休祝日の混雑が激しい。駐車場スペースが 利用者数に対して小さい。(開業当初は、こんなに 多くの観光客が来るとは想定していなかった。ま た、飯能から秩父まで、比較的広いスペースを道の 駅として確保できる国道沿いの土地は当地しかな かった。)
- ・横瀬町の観光協会が運営する「ブコーさん案内所」 の現在のロケーションは首をかしげる。道の駅内に 作るか、芦ヶ久保駅前に作るべきではないのか? 車の利用者にも何の案内所なのかわかりにくく、ま た鉄道の利用者には使えない位置にある。ただ狭隘 地のため、土地確保の問題があると考えられる。
- ・「ブコーさん」というゆるキャラがあるが、「武甲山」と結びつきにくい。外からの観光客には残念ながら訴求力がない「ネーミング」であり、キャラクターである。
- ・「駐車場が狭い」とのアンケート結果が出ているが、 谷間のロケーション上、これ以上の駐車場の拡大は

難しいと思う。また、仮に立体駐車場等を設置する と、景観が悪くなる。第一駐車場は県が、第二駐車 場は西武鉄道が、そして道の駅は横瀬町と横瀬町の 公社が管理しており、この4者が協力して、この道 の駅が稼働している。

・道の駅の従業員のほとんどが地元女性で、夏期18:00、 冬期17:00の閉店後は、各家庭で夕飯の準備にかか る。ライフ&ワークバランスを考えると、現在の営 業時間で良いと思う。何でも観光客の要望に合わせ る必要はない。観光客も地元のライフスタイルを尊 重すべきだと考える。

林道・山道・町道の調査 全ての道は、果樹公 園あしがくぼ道の駅に通じる

- ・横瀬町は、近隣の西武秩父線沿線の市町村と比べ て、秩父札所巡礼路・登山道・山を走る町道・林道 が集中しており、観光客が歩ける、あるいは自転 車・バイク・自動車で周遊できる可能性が高い地域 であるということが今回の調査でわかった。
- ・山の上の林道が舗装されており、道も分かりやす く、歩行登山者に取っては、エスケープロードに なっている。ただし、バス等の公共交通機関はな 111
- ・大野峠→丸山→果樹公園村・木の子茶屋の登山道は 概して良く整備されている。
- ・日向山→芦ヶ久保駅への町道(舗装路)は、登山者 の下山道として極めて有用で安心。
- ・下山道として琴平神社→「源寿院別院」観音像への 「風の道」は、風景が変化に富んでおり、眺望が良 い魅力的なコースである。源寿院別院からは道の 駅・芦ヶ久保駅が眼下に見え、電車・車・人の動き が、見ていて楽しい。
- ・下山した後、道の駅が閉店後でも、自販機・トイ レ・ベンチ等が使えるので、ハイカーにとって安心 感があり、一息付ける。「道の駅」は、下山後の利 用価値が高い。

林道と山道の課題と提案

・日向山→ト雲寺の「六番峠登山道」は、落ち葉が堆 積、木製の階段が崩れ、標識が倒れ、整備が必要で ある。日向山方面から下りルートによく使われるの

- で、雨の日の翌日は滑って危険。学生も何度か(登 りで) 転んだ。ITBの旅行ガイドでも滑り易い危険 な山道として紹介されている。
- 積し、落ち葉の下に小石も隠れている。とくに下山 時に危険である。けが人が今後出る可能性がある。 景色は良く、魅力的な山道なので整備して残したい。
- ・丸山林道は、眺望が利かず、常緑樹ばかりの風景 で、単調で登山道として面白みがない。ただし、サ イクリスト、ヒルランナーのトレーニング用コース としては活用できそうである。
- ・苅米林道は、途中に別荘地もあり、見晴らしも良い 場所があり、日当たりが良く、落葉広葉樹が多い。 紅葉も美しく、変化に富んで楽しい。ハイキング コース本体あるいはハイキングコースのエスケープ 路としても活用可能である。
- ・ト雲寺→六番峠登山道→琴平神社の、あるいは秩父 市の金昌寺→県民の森のハイキングコースからの下 山道に、「果樹公園」内の舗装された町道を使うこ とは、「風の道」下山道のエスケープ路として活用 でき、日が暮れてもハイカーにとっては、舗装道の 存在そのものが安心感を与える。このことに着目し て、芦ヶ久保駅を起点に登山を始め、他の場所に下 山するのではなく、最終的な下山地を「果樹公園あ しがくぼ道の駅」および西武鉄道の「芦ヶ久保駅」 に設定し、山道の案内板も「道の駅」の方向を必ず 示すようにし、さらに各山岳系出版社のガイドブッ クにも、琴平神社から芦ヶ久保駅下山を勧めるよう な広報を行うと良い。
- ・六番峠登山道は下山道としては危険。また県民の森 →金昌寺は、下りた後のバスの便が少ない、丸山→ 大野峠→芦ヶ久保駅は、谷の薄暗い山道が下山道な ので、早く暗くなる。ハイカーには逆コースを提案 し、下りには果樹公園村の舗装された町道を使うこ とを勧め、安心して道の駅に下山、道の駅で休憩を 取るように誘導する広報を考える。
- ・併せて、琴平神社から道の駅の下山途中にある農村 公園へのアプローチ(下山用のトレイル)も整備し 直し、農村公園の広報を充実させると良い。
- ・芦ヶ久保駅→二子山→名郷の登山コースは、名郷か ら飯能駅までのバスの便が少ない。そこで、上記と 同じように名郷→二子山→芦ヶ久保駅の逆コースを 提案・広報すると、道の駅が下山者向けの休憩所と

なる。

- ・横瀬駅を起点・終点とする「ひゃくいちたんぽ」→ 天王山→愛宕神社→天狗様の「思索の森」のハイキング道は、何年も整備されておらず、廃道のようになっている。1時間半程度の手軽な丘歩きのコースで、しかも変化に富んでおり、それほど危険ではないので、廃れたままにしておくのは、惜しい。もう少し、コース周辺の間伐もすべきであろう。
- ・宇根地区には、まだ美しい田園風景が残っているので、この風景は是非維持してもらいたい。「思索の森」、宇根の農村風景、羊山の芝桜の景観は連動している。改めてつなげて歩ける散策道を整備することを考えることが望ましい。

秩父巡礼路の魅力

- ・横瀬町は、秩父観音霊場(札所)34カ所のうち、5番~10番を有しており、札所巡礼者が初春~初夏、10月頃~12月頃にかけてコンスタントに歩いている。2018年春には、中国から仏教信者の団体がマイクロバス3台で巡る事例もあった。一部には御朱印収集、聖地巡礼、インバウンドという観光スタイルの流れが秩父地方にも押し寄せている。
- ・札所10番大慈寺は、アニメ「心が叫びたがっている んだ」(2015年)のロケ地で、若者がこの寺とその 周辺を散策する現象が今でも続いている。
- ・横瀬町の巡礼路は未舗装の古巡礼路が一部残り、あ ぜ道や土道歩きを楽しめる。
- ・古巡礼路・里道・自動車道が随所で並行して走り、 札所間移動=巡礼路のオプションが多く、そのこと を広報すべきである。

学生とともに作成した地図

西武秩父線沿線の主要なハイキングコース・巡礼路等を地図上にプロットしてみた。

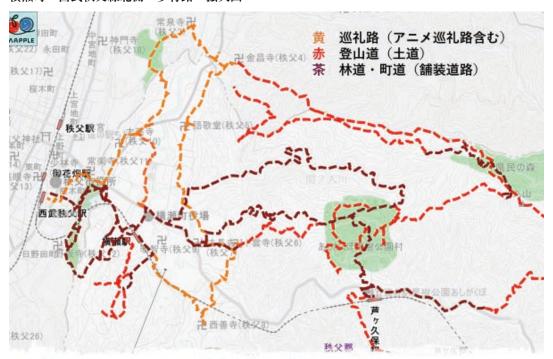


赤は主要なハイカー用バス路線

横瀬町にハイキング路と巡礼鑑が集中している。 ※昭文社 スーパーマップルデジタル19で作成。

淑徳大学地域連携センター年報 第3号 2019

横瀬町 西武秩父線北側 歩行路 拡大図



横瀬町には 観光客が歩く道:林道・農道・登山道・巡礼路がある。

歩く文化・歴史がある土地。

※昭文社 スーパーマップルデジタル19で作成

横瀬町 西武秩父線南側 歩行路 拡大図



思索の森(宇根地区)と秩父市の羊山は丘レベルの散策コース。 赤「思索の森」山道ハイキングコース 昭文社スーパーマップルデジタル19で作成 エンジは、一般道でハイキングコース

8 岩 村 沢 也

横瀬町でゼミ活動中の写真

地域の地理の把握や説明のためには、写真で記録・整理することが大事な作業だった。 全てスマホで記録・編集。現地ではLINEも必須の連絡手段だった。

果樹公園あしがくぼ道の駅 利用者アンケート調査実施風景



道の駅利用者聞き取り調査の準備



道の駅聞き取り調査実施中



道の駅利用者聞き取り調査中



聞き取り調査個票を集計する。

里山まるマルシェの日



里山まるマルシェ当日の標識



里山まるマルシェ出店の一例 この日は地元の住民が出店



里山まるマルシェ出店の一例 この日スペシャルの商品も並ぶ。



道の駅の前。川で遊べる。

登山道の調査



放棄された「ひゃくいちたんぼ」 放棄されていなければ、美しい風景。



人の気配がないたんぼの上の山道 山の手入れは行き届いていない。 倒木も多いが、ちょっとした散策路



紅葉が美しかった「山の花道公園」 今は維持されているが、今後手入れが心配。



横瀬集落から「苅米林道」を登る。 途中に別荘地があるが、荒れ出している。 見晴らしは良い。

10 岩 村 沢 也



六番峠道の壊れた木製の階段



「六番峠道」は何年も整備されていない。ガイドブックにも「滑りやすい」と書いてある。



美しい「六番峠道」上の牧場 こういう風景は精神的に貴重である。



見晴らしの良い琴平神社近くの休憩所。 トイレと東屋(食事が取れる)はありがたい。



「日向山」駐車場からの春の山景色。 日向山周辺の景色は大切にしたい。 色の薄いところは桜の花と新緑。



日向山から臨む武甲山は美しい。風景の視点がもっとあって良い。



9月の「寺坂棚田」、曼珠沙華が楽しい。 寺坂棚田は四季折々楽しめる。 農業と観光の共生の工夫がある。



寺坂棚田からの丸山林道は歩行路としては変化がない。 ただし、サイクリングやジョギング等、トレーニング に特化した道として使える。



丸山からの下山道 良く整備されている。



「風の道」を下りる。落ち葉が堆積 落ち葉の下には小石が転がる。危険!

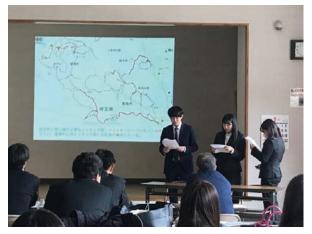


「源寿院別院観音像」近くから芦ヶ久保駅を臨む。電車 や人の動き、光の動きが楽しい。



野仏が多い「秩父巡礼路」。 様々な表情を道すがら楽しむ。

12 岩 村 沢 也



2019年1月31日 横瀬町での報告会。 横瀬町の登山道と巡礼路の分析



同左。道の駅の交通量分析



「あしがくぼ氷柱」を視察する。



氷柱 野外ストーブを囲んで。 この日は、横瀬町でプレゼンの日でした。



2019年2月26日国土交通省・関東整備局主催大学・ 道の駅連携事業報告交流会でのプレゼン



学生は、この経験を通して自分たちの調査研究 の意味を体感する。

- ・秩父市奥地や小鹿野地区の札所と比べると、札所の 番数が若く、鉄道の駅からも近く、極端な坂道も少 なく、危険な箇所が少ない。巡礼ツーリズムの展開 の可能性が高い。
- ・巡礼路沿道には、蕎麦屋、農村レストラン、カフェ、 昔ながらの食堂があり、少人数のグループであれ ば、休憩可能である。地元が巡礼路を観光資源と意 識するのであれば、今後より洗練された魅力的な立 ち寄り休憩所・食事処の整備が望まれる。
- ・各寺には、駐車場・トイレ・納経所完備で、巡礼者 あるいは一般の観光客も気持ちよく立ち寄れる。
- ・また横瀬町内の札所間の風景が、農村と住宅街の中 間的環境で、このバランスが安心感と楽しさを与え る。しかし、だからこそ、景観を維持することに努 力されることを望む。

巡礼路に関する課題と改善提案

- ・美しい田舎の風景が退化しつつあるのではないか?
- ・日本は街中の修景への意識が低いが、長野県の小布 施や長野市の松代地区のように歴史的景観地区を指 定して、「修景」していく努力が、横瀬にあっても 良いのではないか。
- ・とくに西武秩父線で、アクセス容易な札所が、横瀬 町の秩父札所寺院である。札所寺院そのものだけで はなく、巡礼路の景観をもっと意識しても良いので はないか?
- ・横瀬町の歩行路には、日本の在来種の植物、あるい は秩父固有の植物が多いと見受ける。町全体の植物 をコーディネートするという視点が欠けている。横 瀬町の歴史民俗資料館には、地元の固有種植物の表 示はあるが、それをどのように保護・保全するのか と言う視点がない。
- ・秩父巡礼路の魅力は札所寺院境内の魅力だけではな く、途中の巡礼路そのものの魅力(景観・環境)で もあることをもっと意識する必要がある。
- ・巡礼路そのものではないが、日向山と六番ト雲寺を 結ぶ「六番峠道」は、越生・都幾川・飯能と秩父を 結ぶ古い尾根道の一部である。ハイキングコースと して夏期には日陰と森林浴を、冬には冬枯れの森を 楽しめる良いコースなので、この道は古道として大 事に管理すべきだと考える。
- ・沿道の食事処の広報戦略が必要と考える。地図と

- ネットに掲載、SNSでの発信が必要。
- ・巡礼路のある横瀬地区では、秩父市街地のようにレ ンタサイクルのアクセスは現在なく、歩行または車 で巡る巡礼地区となっている。宇根地区の景観も含 めて農村景観が維持できるのであれば、観光客向け に田舎の景観を楽しめる町としてレンタサイクル (坂が多いのでとくに電動アシスト付きレンタサイ クル)があると良い。学生の宇根地区の景観の評価 も高かった。(一方、芦ヶ久保地区にはブコーさん 案内所に併設されてレンタサイクル貸し出し所があ るが、急坂が多く、どこまで利用されるているか疑 問である。)

全体への次年度に向けての学生が参加する事業 の提案

- ・安全性が限界に近づいている「風の道」「六番峠登 山道」の町を挙げた整備事業を提案。地元の子ども や住民、淑徳学生も交え、熊手で落ち葉を掃き、小 石を取り除く。ブロワーを使うことも考えられる。 可能であれば、道路標識、木材階段の整備を行う。 歴史的歩行路・景観の維持管理は、地元の観光資源 としてもっと意識を高く持って維持管理すべきと考 える。→結局岩村ゼミが自主的に山掃きを行った。
- ・地元の人の果樹公園や生活に関する聞き取り調査か ら、道の駅との関わりを考える。

横瀬町役場への提案

- ・すべての歩行観光客(登山客)を他所から芦ヶ久保 駅(道の駅)に導く道標を沿道(登山道も含む)に 立てる。日向山→道の駅の下り坂は、町道とトレイ ル(「風の道」と農村公園への山道)があるが、一 方で町道は、安心して楽に歩けるので、広報やガイ ドブック、マップ等でアピールするのが良い。
- ・道の駅に自家用車が多く入るために、週末は国道が 渋滞を起こしている。道の駅利用には、長期的に は、車客を減らし、鉄道客を増やす工夫が必要と考 える。景観を破壊する駐車場の増設は反対。
- ・道の駅に寒いときに長く居られるカフェが必要。現 状では、テラス席が多く、夏は暑く、冬は寒い。食 堂は長時間滞在するのは、待ち客が多いので、気が 引ける。道の駅内の敷地ではないが、芦ヶ久保駅前

の、休業中のそば屋をリノベーションしてカフェに できないか。食材を地元の農家や道の駅から調達 し、地元若者の雇用を確保し、果樹公園村を見晴ら せるカフェは、コンセプトが良ければ流行るだろ う。道の駅の従業員が主婦層中心で、夕方は家に戻 り夕食の準備をしなくてはならないので、道の駅の 営業時間を延長することは難しい。ライフ&ワーク バランスを壊してまで観光客のために営業時間を延 長するのは、地域おこしの観点から好ましくない。 道の駅の仕入れ機能や食品加工機能を活用すること によって、別の経営主体が鉄道駅前でカフェを運営 できるようにすることは、カフェの運営母体にとっ ても、道の駅にとっても、西武鉄道にとっても互い の利益となるであろう。また、駅前で電車を待つ客 が、道の駅から坂を登ってあわてて駅に駆けつける 必要も無く、ゆっくり風景を見ながら旅を回想し、 地元の食材を楽しむことができる。夜景を楽しむレ ストラン・カフェの可能性も考えられる。カフェ設 立に当たって留意したいことは、優れた観光地で は、カフェやレストランでは、客の視線が風景に向 かうように作られていることである。駅側の風景も 電車の往来を利用客に感じさせることが必要だが、 その一方で、果樹公園村の山肌に広がるリズムのあ る風景は、観光資源として活用したい。また、地域 全体で景観をしっかり守ることが必要であると考え る。

教員の準備と学生への教育効果 教員の準備

西武鉄道の芦ヶ久保駅は、果樹公園村に直結し、また、いくつかの登山道の起点になっていることは、すでに知っていた。私自身、西武秩父線沿線の「奥武蔵」の主要ハイキングコースはすでに中学時代から歩いており、「あしがくぼ果樹公園村」、武甲山、丸山、大持・子持山、妻坂峠等すでに踏破していた。しかし、大学のゼミ活動の一環としてこの地域を分析するに当たっては、もう少し地元での土地勘が欲しいと思った。そこで、すでに前年度から秩父市・横瀬町の「アニメの聖地巡礼」というテーマで学生と歩いていたので、今度は横瀬町も含めて、この地域の「道」をもう少し調べてみたいと思った。まず、秩父札所34霊場を徒歩で全て巡ることにした。この作業が2018年の

3月からゴールデンウィークまで続いた。教員単独で、34札所を巡り、この間、各寺院の僧侶および札所番の方からお話を伺い、さらに秩父市および横瀬町の観光案内所・役場職員、県の施設である県民の森の職員、そして道端で住民の方とお話をする機会があり、次第にこの地方の「土地勘」、自然、気候等に対する経験知を高めていった。早春から花粉と花の季節を経て、晩春の時期まで季節の移ろいを経験することができたことも、この地域の土地柄を理解するのに必須だった。私はビオトープ管理士2級の資格を持っており、東京都小金井市の自然再生事業や埼玉県富士見市の自然公園再整備事業に関わる機会があったので、それらの経験を生かして、秩父地方の自然環境の見立てを行い、風景のでき方も意識的に観察した。

ゴールデンウィークまで秩父に何度も通い、100km の巡礼路を踏破した。その後、観光も兼ねて、学生と ともに少しずつ、横瀬町・秩父市・小鹿野町を歩いた。

学生の成長 経験知を積み、空間把握に努める

3年生はすでに前年からアニメの聖地巡りで横瀬町を最低2回は歩いているので、ある程度の空間把握ができていた。しかし、学生が日帰りで歩ける距離は一日では10数キロに限られており、横瀬町の全体のイメージを把握するには至らなかった。一方2年ゼミが確定したのがゴールデンウィーク明けで、まずは大学内で、横瀬町・秩父地方の地図を自ら作成するところから始めた。

その後、学生を一人あたり最低4回は歩くようにさせた。巡礼路歩き、山歩き、イベント参加、道の駅アンケート調査等多様なプログラムを用意し、その中から年間最低4回は現地で活動することを義務づけた。私自身は、学生を引率する日を含めると、2018年度中に延で25回以上、秩父地方に通った。

日程が合わずに、私が行けないイベントに学生たちを単独で行かせることもあった。年末に向けて学生は徐々に秩父地方への心的距離感をなくしていったと思う。札所巡礼も実際にやってみると意外と楽しいことがわかり、横瀬地区の山が低山なので、冬でも登山を行い、一部単独で散策路の調査に行かせたりもした。現地調査では最初、教員によるかなり細かな指導が必要で、指導用に準備した調査書き込みシートを必ず持

たせて現地調査に臨ませた。また、写真を多数撮ら せ、行動記録を写真付きでまとめさせた。学生たち は、調査を記録すること自体、最初は何を書いて良い のかわからなかったが、多くの学生は年度末には、道 や風景の状況を表現し、環境資源としての風景や環境 の分析、案内板のあり方、住民のライフスタイル等を 徐々に把握できるようになった。現地でメモを取り、 Wordにまとめ、さらに情報を持ち寄ってPowerPoint でグループ発表するということが可能になった。

学生に登山経験や巡礼経験が無いということ

現代の大学生の多くは、小中学校時代に登山を遠足 等で経験していない。したがって、山道がどのような ものなのか、また登山中の寒暖差や店がないこと等の 想像ができない。溝の深いグリップ力のある靴をもっ ていない学生も多い。登山中の行動食(非常食)や着 替えを用意せず、冬季でも手袋・防寒具への備えが甘 い(用意しない)学生もいた。しかし、今回の登山経 験は、低山ではあったが、学生にとって初めての登山 ということもあり、今後の彼らの山歩きの認識づくり に大いに役立ったと思う。登山道分析も、まずは自分 たちが何度か歩いてみないと、何が課題なのか、皆目 見当がつかない。

巡礼路歩きに関しては、現代の若者のほとんどは、 札所巡礼はしたことがない。しかし、一部の学生は 「アニメの聖地巡礼」は経験している。その意味では、 全く「巡礼ツーリズム」の経験が無いとは言えない。 3年生は2年時に2度ほど、秩父を舞台にした二つの アニメ映画の舞台を巡った経験があり、また関連図書 を読んだ。

一方、観音霊場を巡る札所巡礼というのは、2年 生・3年生とも初めての経験であった。何を隠そう、 教員の私自身も観音霊場札所巡りは、今年度初めての 経験であり、朱印帳と蝋燭・線香持参で34札所を巡っ た。秩父の寺院は小ぶりながらも、それぞれの寺院が みな個性的で、次第に寺院の持つ芸術性・精神性・歴 史性・環境保全への姿勢、また寺院を結ぶ巡礼路のも つ魅力、途中の風景の魅力や巡礼路の多様性への認識 を持つようになった。

ただ、学生の巡礼路への認識は、まだ断片的で、一 面的である。例えば、「巡礼路をよりバリアフリーに すべきである。」という意見が学生から出る。しかし、

札所巡礼には、一種の修行として、長い距離を歩き、 時には山を越え川を越え、暗い山道、急な坂道を上り 下りしてこそ、「結願」に至るという、自分の心身を 鍛える修験道の伝統があることを学生は知らない。 様々な環境、気候、身体の状況と向き合いながら、秩 父巡礼路ではおよそ100kmの徒歩巡礼が課せられてい る。一部には修験道のような、危険な筒所もある。こ のような巡礼の意義や背景を学生は知らない。「バリ アフリー」という大学の講義で習った概念と違う価値 観が、秩父では生きていることを、現地で初めて知る ことになる。

観光と生活・施設運営

道の駅の利用者アンケートを通して、多くの利用者 から出てきた要望が、道の駅の営業時間の延長であっ た。夏期18:00、冬季17:00で閉店では早すぎるとい う声が多かった。しかし、道の駅に携わる人々は地元 の人々で、道の駅の施設は、地元の人々の利益に貢献 し、かつ観光客の利便性につながる必要がある。この 2つの思惑のバランスの上に、道の駅が成り立ってい ることを学生は初めて気づいたのではないか。

学生も私も、当初は営業時間はもっと長い方が良い と考えた。しかし、従業員の多くは地元の主婦であ り、夕方仕事を終えると、帰宅して夕食の準備に入ら なければならない。地元のライフ&ワークバランス を確保するのが大前提である。また、多くの観光客 は、暗くなると道の駅には立ち寄らずに帰路を急ぐの で、利用者は激減する。地場野菜を提供する農家は当 然、夜は品物を納入しない。運営母体の道の駅として も、夜の営業は、コスト的に厳しい。また、そもそも 夜働く従業員は、地元では確保できない。消費者(観 光客)の要望に全て応えるのが、必ずしも良いことで はないことを学生は学んだのではないか。

もう一つ現地で学んだことは、道の駅の第一車場と トイレは県の施設であり、道の駅の店舗・加工場・テ ラスは町の施設であり、第二駐車場と駅前広場は西武 鉄道の施設であり、また道の駅の経営母体は指定管理 者であるということで、この四者の協働によって全体 としての「果樹公園あしがくぼ道の駅」が成り立って いることである。四者間に合意がないと、更なる共同 プロジェクトは難しいということである。単純に道の 駅の事務所に学生が何かを提案しても、四者間の調整 と合意がないと、なかなか実現しないこともあるということがわかってきた。例えば、駅前に道の駅関連の 案内板や氷柱祭りの誘導旗を立てるにしても常に調整 が必要である。

学生は、若者の見方、観光客の立場、「一見さん」でしか、現地で物事を見ていない。現地の複雑な利害関係・権利関係・社会関係・土地所有関係・政治的駆け引き・歴史的経緯があって、今の状況があるということを少しずつ、理解していった。

これらの知識は、道の駅の支配人の高野直政氏のレクチャーから、また教員が町の職員・県民の森等の関係者・札所関係者から聞き取った情報をその都度学生たちに伝えることによって、広まっていった。

学生個人の学習とグループ学習の連続学習

学年当初のゼミ生募集の説明会では、2018年度は、本ゼミは最終的には横瀬町へのプレゼンと、国土交通省関東整備局主催のプレゼンがあることを伝えていた。しかし、それがどのようなものになるのかは、教員自身も4月当初は見当がつかなかった。漠然と今年度は道の駅の利用者アンケートの実施と分析、横瀬町をくまなく歩き、「道の駅」と横瀬町の「道」について考える、というイメージしかなかった。

教員自身も、横瀬町の地理・土地勘が無かったので、まずは3月から5月に掛けて、横瀬町と秩父巡礼路を歩いた。とくに横瀬町は、登山道も含めてくまなく歩くことにした。

4月末からは、学生も横瀬町に入り、アンケート調査、山道・巡礼路調査を行い始めた。

学生から見れば、最初は教員が用意したアンケート調査の方法を理解・実施し、現地の視察に付いていき、現場を見るという作業でしかなかった。そして、自分の見聞をまとめたものを、教室で発表をしてもらった。年度末には、自分のまとめをPowerPointにまとめてもらい、それを持ち寄って、各発表担当を決め、全体で編集して一本のプレゼン資料にまとめた。最初のまとめでは、全体で1時間もかかるプレゼンとなり、内容が多過ぎ、焦点が定まらないものとなった。そこで、それを何が大事かを再検討し、30分の発表に縮めていった。そのためには2日間にわたる作業が必要であった。

発表者も7人程度に抑えたため、全員の発表とはな

らなかったが、この準備作業には、できる限り全員参加を義務づけ、担当箇所のスライド改善や全体への貢献を各人に求めた。1時間の発表を30分にする為には、スライドの枚数を減らすこと、スライドの改善、ことばの厳選、シナリオの修正、そしてプレゼンの予行練習が必要で、30分の発表にするためには7回程度、訂正・練習を繰り返した。

この作業は、学生にとっては忍耐のいる作業で、1 月の期末試験の忙しい時期だったが、パフォーマンスとしてプレゼンテーションを完成に近づけていく過程で、それまでは個々の調査結果しか把握していなかった学生が、自分たちの調査の全容を把握し始め、パフォーマンスをよくしていくことの意味を、身体で理解していくことになった。また、繰り返しの練習で、自分たちの知識を定着させていった。一部の学生は、ボランティア研修やインターンシップ、各種講習会との兼ね合いで練習に出席できなかった学生もいたが、そのような学生でも、横瀬町の発表または国土交通省の発表には、最低1回は参加するように義務づけた。

横瀬町でのプレゼンの準備は、横瀬町の状況を理解した上での発表内容になっているのか、学生の個人的な感想に終わっていないか、複数の視点を考慮に入れた発表になっているか、責任のある提案であるかを相互チェックする訓練の場となった。

次に2月26日の国土交通省の報告会では、各大学に 割り当てられた時間は10分であった。したがって、横 瀬町の30分の発表を更に短縮する必要があった。2月 の発表日は2年生の短期海外研修実施中に当たってお り、2年生のゼミ生の参加数(観覧のみの学生も含め る) は半数の7人となった。3年生の当日参加者も、 講習会の日程や海外渡航日とバッティングしているも のがいたが、12名が参加した。その中で、発表者は司 会も含め2年生・3年生合計で7人とした。発表者は できる限り、横瀬町で発表しなかった学生とし、かつ 準備日に参加できる学生で構成させた。10分の発表に 圧縮するために、発表ポイントの整理、スライドの厳 選、文言の整理、シナリオ制作を行う作業日が必要 で、かつパフォーマンスの練習を5回程度行った。国 交省の発表の準備には、春休み中ということもあり発 表予定者のみ参集させた。

淑徳大学の他に7校が発表交流会に参加した。内容 的にはおそらく、我々の発表が、一番データが多く、 盛りだくさんだと思われた。発表8校の中で、一番頻

繁に現地を視察したのは我々であり、また当日参加人 数も2学年合わせて(全ゼミ生は31名中)19名であっ た。多くのデータを圧縮して急ぎ足の発表だったの で、若干わかりにくかった内容だと思われたが、語る べき内容を、一番多く用意していたグループだったと 言って良いだろう。他の大学は数日の現地調査・合宿 で発表をまとめたもの、学生イベントの内容をまとめ たものであった。延べの現地調査期間・回数は淑徳 チームが圧倒していた。

ただ、淑徳の学生は、10分の発表では、内容を詰め 込みすぎたとの感想を抱いたのではないだろうか。現 状分析の報告とともに、道の駅・横瀬町への提案とそ の理由も時間を掛けて説明しなければならなかったか らだ。内容の精査と時間配分の難しさを学んだと思 う。

また、学生は他校の発表を聞き、他校が自分たちと 皆違う方法を取っていること、プロジェクトの方法、 内容よりもパフォーマンス重視の大学、道の駅や地元 自治体と大学との関係が皆違うことなどを比較するこ とができたと思う。さらに淑徳の学生が、スーツを着 て、公の場でプレゼンテーションができること、また プレゼンテーションにはどのような段取りを踏まなく てはいけないかを学んだであろう。次回は、教員がい なくても、自分たちで、ここまでできることを求めた 13

地図ソフトの活用

地域を説明するにあたっては、文章と写真の他に、 地図が極めて有効である。ただし、プレゼンテーショ ンに適した地図を探すこと、あるいは作成することは かなり難しい。今回は12月に教員が地図ソフト「スー パーマップル19」を購入し、西武秩父線沿線の登山 道・巡礼路、また横瀬町内の登山道・巡礼路・林道・ 町道をプロットして、独自の報告用の地図を作成し て、プレゼンテーションに使った。Google Mapでは、 プレゼン用の細かな記載ができないため、地図ソフト を使用してみた。そして、地図ソフトが、思いのほか 便利で、オーダーメイドの地図が制作しやすいことが わかった。

山道を含め、歩行ルートを簡単にトレースできる。 ソフトに入っていない山道も、地図上に概略はプロッ トできる。移動ルートの色分け、用途別地図やコース

ラインのデザインも各種用意されている。地図の拡大 縮小が指定できる。作成した地図を、PowerPointある いはWordに貼り付けることができる。営利目的でな い限り、作成した地図を自由に公に使用できる。

地域振興・観光地域開発をするときに、この地図ソ フトは、かなり有用であるばかりか、必須であること がわかった。地図に様々なデータを集積することで、 見えてくる現実がある。今回、例えば、奥武蔵のハイ キング路・巡礼路をあるガイドブックから一枚の地図 にプロットしていったが、驚いたことに横瀬町に観光 用の歩行路が集中していることを発見した。

今回は、学生には学年当初手書きで横瀬町の地図の 作成をさせ、2月3月のプレゼン用には教員が地図制 作を行ったが、学生にやらせたい作業である。

岩村ゼミと横瀬町および国土交通省との今後の関係

1月31日の横瀬町の発表では、学生が発表した横瀬 町の状況は、町の関係者の方が良く把握していたであ ろう。また、学生の提案は、道の駅への直接の商品開 発やイベントの提案ではなく、むしろ道の駅の周辺部 と道の駅を結ぶことを考えた内容であり、提案は道の 駅の事務所ではなく、主として横瀬町役場に向けての ものとなった。

我々の報告の中で新たな言説として示せたのは、横 瀬町には、登山道(山道、トレイル)、巡礼路、林道、 町道等歩行路が、近隣の他の自治体と比較してかなり 多いという事実であった。また、役場として気がつき ながら対応が後手になっていた登山道整備の問題点 を、学生が自ら指摘したことは、関係者にインパクト があるものとなったのではないか。歩いて写真を撮 り、廃道のようになっている箇所があること、落ち葉 の堆積で歩行に危険なことを、学生が公の場で指摘し たことは、役場が、今後リアクションを起こさなくて はならない行政課題であることを改めて認識させる機 会となったのではないかと考えられる。次年度は、実 験的に淑徳の学生が、登山道の落ち葉掃きを一部行っ てみることを提案してみた。横瀬町は「日本一歩きた くなる町」を目標に掲げている。それにしては残念な ハイキング路、危険な登山道が多い。

今回、横瀬町の「果樹公園あしがくぼ道の駅」が、 自動車利用者にとどまらず、とくに登山客やハイキン グ客、鉄道利用客にも活用できる「道の駅」であるこ

18 岩 村 沢 也

と、声ヶ久保は谷間と斜面地の集落であるが、町道が しっかりしており、また鉄道が30分おきに停車するこ とを考えると、歩行旅行の起点ではなく、歩行旅行の 終点・到達点として整備することを提案した。その流 れから、山道や農道で、「道の駅」への方向を示す案 内板の整備や、ガイドブックの出版社に、当地の「道 の駅」と声ヶ久保駅を起点ではなく終点するコース設 定を働きかけていくことを提案した。

さらに、列車の到着を待つ客の為と、観景スポットとして鉄道の駅前にカフェを作ることを提案した。これは、道の駅の食堂の混雑緩和や長時間滞在を可能にさせ、芦ヶ久保駅を飲食のためのデスティネーションとするための方策でもある。また、道の駅が従業員のライフスタイルやコストの面で夕方に閉店しても、別の小さな経営体であれば、夕方以降も営業可能ではないかと考えた。さらに風景を見せるロケーションとして駅前広場は絶好の場所にあると考えた。

「道」との関連で、淑徳大学が提案できることが、これからもあると思われる。すでに立教大学が観光行政支援で横瀬町に入っているが、淑徳大学は「道の駅」という視点から、調査・支援する可能性を探っていきたい。

また、国土交通省の「日本風景街道」というプロジェクトで、秩父魅力アッププロジェクトチームという団体が、平成26年度 日本風景街道 関東優秀活動賞の内、「秩父路ルネッサンス」とうい名称で【地域活性化部門 優秀賞】という賞を受賞している。道の駅の連携による観光客の集客力向上活動がその受賞の理由だそうだが、平成30年の段階では、この活動や賞の存在を私たちは知らなかった。あしがくぼの「道の

駅」との関連で、我々の研究・および連携プロジェクトは今後も進むと思われるので、「風景街道」の活動との接点が生まれるかもしれない。

注

1 淑徳大学経営学部観光経営学科教授

参考資料

『スーパーマップル全国版デジタル19』昭文社 2018年 岡村亮輔『聖地巡礼 – 世界遺産からアニメの聖地まで』中央 公論新社 2015年

Fruits Village Ashigakubo Roadside Station and Shukutoku University Collaborate Project in 2018 Students' Research: All Roads and Trails Connect with Fruits Village Ashigakubo Roadside Station.

Prof, Takuya Iwamura, School of Tourism and Management, College of Business Administration, Shukutoku University

The students belonging to the sophomore and junior seminars, led by Professor Takuya Iwamura of School of Tourism and Management, Collage of Business Administration at Shukutoku University, walked many hikers' and pilgrimage trails and mountain roads in Yokoze Town, Saitama Prefecture through 2018 academic year, conducted interview-based investigation to almost in total 300 people and reached many findings. Due to overuse of Fruits Village Ashigakubo Roadside Station on weekends by car-driving holiday-makers and motorcycle riders, students proposed sustainable tourism by using trains and rebuilding many trails leading to the roadside station, a shift from car-based tourism to railway and rambling tourism.

研究ノート

飲料メーカーおよび近隣スーパーとの協働による PBL ーキリン「午後の紅茶」広告 POP コンテストを通じての地域参加ー

杉原麻美1

要約

本稿では、飲料メーカーおよび近隣スーパーと協働して2018年9月~12月に人文学部表現学科で行った PBLについて報告する。このプロジェクトでは、表現学科の学生が近隣スーパーの視察を経て制作した広告POP案を大学祭で展示し、来場者による一般投票と試飲会を通じて、学科の専門性をいかした 地域との接点づくりをはかった。企業ニーズを捉えた地域連携モデル、 $1 \sim 3$ 年次の学生による多面的 な学習デザインの視点から考察する。

1. はじめに

1.1 取り組みの背景と目的

大学教育へのアクティブラーニングの浸透とともに、企業や地域と連携したPBL(Problem-Based Learning、Project-Based Learning)を採り入れた授業が専門領域を問わず広がっている。学生が専門的な知識や技能を活用して課題に取り組み、授業内活動と授業外活動、個人学習とグループ学習とを繰り返しながら学習を進めるPBLは、学生に実践的で深い学びを促す。

溝上 (2014) は、高等教育にアクティブラーニング型授業が必要である背景のひとつに、知識基盤社会で求められる「情報・知識リテラシー」の育成を挙げている。この情報・知識リテラシーは「情報リテラシーを基礎としつつ、①情報の知識化 ②知識の活用 ③知識の共有化・社会化 ④知識の組織化・マネジメント化の諸能力を指す」[1, p.59] と定義されており、アクティブラーニング型授業の代表的な方法と、上記

表 1 情報・知識リテラシー育成の観点からの特徴

	①情報の知識化	②知識の活用	③知識の共有 化・社会化	④知識の組織化・ マネジメント化
ピアインスト ラクション	_	0	0	-
LTD 話し合い 学習法	_	0	0	0
PBL	0	0	0	0

※溝上 (2014) [1, p.78, 84, 88] より作表

①~④との対応を示している(表 1)。この中でPBLは、①~④のいずれにも作用可能な学習方法とされている。

表現学科の専門教育科目には、動画制作や取材記事の執筆、広告企画など、作品制作を伴う科目が多く、これらの科目を中心に担当教員がPBLを採り入れている場合がある。また、ゼミで地域と連携した活動に参加するケースもある。しかし、人文学部は2014年の学部開設からまだ歴史が浅いため、PBLの導入例は限られており、運用ノウハウも不足している。今回の取り組みは、企業と連携したPBLであり、かつ東京キャンパスの近隣スーパーと協働した地域連携である。本稿では、この地域連携型のPBLにおいてポイントとなった大学祭の活用のほか、参加対象の学生と学習プロセスの設計、正課科目・正課外活動の組み合わせ、住民参加を促す工夫点等を報告する。そして、同様のPBLを実施する際の参考として、企業側からの観点、学生側からの観点についての考察も行う。

1.2 表現学科でのPBL実施例と課題

前述のように、表現学科のPBLは各教員が授業内容に応じ個別に協力先を開拓し、試行錯誤しながら実施している状況である。筆者の実施例を以下に挙げる。

[企業と連携したPBL]

・広告制作:キュレーションアプリ(「antenna*」)の
 60秒ラジオ CMのシナリオを制作。企業が優秀作を表彰・講評(2015年:2年生の授業内で実施)

・販促企画:出版社とのコラボ企画で新刊絵本の販促 策を考え実践するプロジェクト。ネット記事の原稿 執筆、大学祭での絵本読み聞かせ会&即売会を実施 (2017年7月~11月、3年生のゼミ活動)

[企業および地域と連携したPBL]

結果でも授業満足度が高かった。

・デジタルメディアの地域活用の提案: デジタルサイネージ (電子看板) を手がける印刷会社と協働したプロジェクト。授業でデジタルサイネージの特性にについて学び、板橋区小豆沢エリアでのフィールドワークを行った後、グループ単位で地域での活用案を企画。板橋区議会議員、町内会長をはじめ10名ほどの来客にプレゼンテーションし講評を受けた。

これらのPBLを通じて、学生は表現学科の専門的な知識や技能が実社会でどのように生かせるかを実感できる。また、自分の作品や企画に対して学外のプロフェッショナルからフィードバックを受けられるため、総じて学生の達成感は大きく、授業アンケートの

(2016年10~12月:2年生の授業内で実施)

一方、コーディネートを行う教員や協力企業側には、PBLの打合せや準備のための時間が必要となり、相応の負荷がかかる。この負荷とバランスをとりながらPBLの成果や学生の学習効果を拡大できる工夫が必要である。また、現状では案件の個別性と属人性が高く、単年度の取り組みになる場合も少なくない。PBLを効果的かつ効率的に運営するノウハウを組織内に蓄積するためにも、実施例、結果、ふりかえり等の情報を学部・学科で可視化し共有化することの検討も必要であろう。

1.3 今回の取り組みの経緯と重視した点

今回取り組んだPBLは、大手飲料メーカーである キリンビバレッジ(株)の首都圏地区本部東京支社と の間で企画化し、実現したものである。表現学科には 広告について学ぶ授業が複数あり、これまでは同社の ようなナショナルクライアント(全国規模で広告宣伝 や販促活動を行う大手企業)の宣伝広報やマーケティ ング部門に協力を仰ぐ場合が多かった。今回のように エリアの顧客先を直接担当している営業支社との接点 は初めてであり、結果的にはこのことが「地域連携」 のPBLにつながるポイントとなった。

同部署は、本学のコミュニティ政策学部が授業協力

で接点を持っており、同学部教授で淑徳大学地域連携 センターのセンター長である矢尾板教授を通じて表現 学科を紹介して頂いた。2018年5月から同社の東京支 社長との間で情報交換を進め、双方にメリットのある PBLの可能性を検討していった。支社の営業活動で は、顧客先の売り上げ増につながる提案として、広告 POPを含めた訴求力のある店頭づくりや購買意欲を 高めるキャンペーン企画が求められる。同社では本部 が用意する汎用的な広告POP以外にも、支社の営業 担当者が広告POPを企画し、社内で優秀作品を共有 することが定期的に行われている。このような店頭で 使われるPOPの制作では、商品や広告技法の知識だ けでなく、店舗の現状、競合状況、地域特性、購買層 への理解も必要となる。そこで、今回のPBLは広告 POPの制作を中心にしながら、学生が地域でマーケ ティングを多面的に学べることを目標にした。キリン ビバレッジを通じてオオゼキときわ台店(東武東上線 ときわ台駅近くに2017年にオープン)の協力を得るこ とができ、店舗見学や広告POPの掲示等をお願いす ることになった。大学祭でのコンテスト実施を前提 に、後学期2年生対象の選択科目「表現文化研究V (創作表現)」の広告課題に採り入れるほか、他学年で も参加できる公募方法を検討し、大学祭でのコーナー 設置と運営はゼミ生にプロジェクトとして任せること を決めた。取り組みで重視した点を以下にまとめる。

「地域連携として〕

- ・大学祭を通じ、大学の地域参加を促す企画にする →来場者に投票して頂くコンテスト形式にする
- ・地域での淑徳大学の発信力につなげる
- →スーパーの店頭でこの取り組みを掲示して頂く

[学生に対して]

- ・学生の気づきを促すフィールドワークを盛り込む →スーパーで店内視察とオリエンテーションを行う
- ・履修科目や学年に関係なく希望者が参加できる
- →表現学科の全学年にSナビ広報を行い公募する
- ・作品講評など学生へのフィードバックを丁寧に行う →結果発表では全作品を共有しながら講評を行う

[協力企業に対して]

- ・各社の協力メリットを理解し、その拡大に努める →地域での認知、集客につながる大学祭を活用する
- ・学生の制作物の数・質を担保できるよう準備する
 - →2年生の授業の制作課題とするとともに、公募で はどの学年でも参加できるようにし20本以上の作

品を確保する。

2. 実施内容

2.1 PBLの全体設計と学習プロセス

前述の観点を反映して、学生の学習プロセスと各関係者がどの段階でどのような関わり方をするかを検討し、PBLの全体設計を行った(表 2)。

PBLの主軸は2年生対象の選択科目「表現文化研究V(創作表現)」で実施し、3回(9月27日、10月4日、10月11日)をPBLにあてた。この科目は、広告、脚本、エッセイなど異なる表現形態の創作課題に学生が取り組み、客員教授の添削指導も受けながら作品を完成させ、各表現様式における創作のポイントを実践的に学ぶ演習科目である。昨年度まで広告課題にしていたラジオCMシナリオを、今回の広告POPに変更し、授業内容も一部調整した。授業は2コマ続きで、10月4日は1コマ目をスーパーでのフィールドワーク、2コマ目をキリンビバレッジの担当者による紅茶と広告POPの特別授業として実施した。

また、履修生以外の有志学生の参加を募ることとしたため、表現学科の全学年を対象に公募し、参加希望学生向けに授業内容の要点を教員からレクチャーするオリエンテーションを開催した。

11月24日~25日の大学祭に向けては、3年ゼミ生が協力企業との打合せや準備を担当し、広告課題だけでなくプロジェクトの運営経験から学ぶ機会とした。各

学習プロセスでの実施詳細は次項にまとめる。

2.2 各学習プロセスの実施内容

① 広告学習:商品広告と広告POPの基礎

履修生の中には、他の授業で広告について学んでいる学生と学んでいない学生が混在していたため、導入となる9月27日の授業では、広告制作のために理解しておくべき基礎知識を中心に以下の内容を盛り込んだ。

- ・広告コピーを収集しグループで分類するワーク
- ・USP (Unique Selling Proposition) とターゲット
- ・プロの作品例と作品意図の資料からの学習
- ・その他 広告の基礎知識 (用語、分類等)

そして、翌週に向けては事前学習シートに沿って、「午後の紅茶」の商品情報、競合情報、USP、ターゲット、インサイトを整理することを課題にした。

② 事前学習の共有:商品知識・情報のグループ共有 翌週の授業では、視察前の30分間でグループごとに



図1 グループ共有の様子

表2 広告POPコンテストを軸にしたPBLの全体設計

			淑徳大学			飲料メーカー	地域スーパー	
時 期	学	習プロセス	教 員	授業履修生 (2年:14名)	ゼミ生 (3年:5名)	有志参加学生 (1年:3名、3年:2名)	キリンビバレッジ	オオゼキ ときわ台店
9月27日	広告学習	商品広告と 広告 POP の基礎	授業	授業		※教員からオリエン		
10月4日	事前学習 の共有	商品知識・情報の グループ共有	授業	授業	授業 (グループを ファシリテート)			
10月4日	地域視察	スーパーでの フィールドワーク	授業 (学外講義)	授業 (学外講義)	授業 (学外講義)	授業外に各自 見学	店頭視察の 同行	視察の 受け入れ
10月4日	背景理解	企業からのオリ エンテーション	授業 (特別講義)	授業 (特別講義)	授業 (特別講義)	※教員からオリエン	授業で特別講義 (商品、POP)	
10月11日	広告制作	視察をふりかえり 広告案を作成	授業	授業内のワーク後 各自で制作	授業外で各自制 作	授業外で各自 制作		
11月24日 11月25日	地域参加 (大学祭)	コンテスト& 試飲会	会場の企画 設営・運営確認 一般投票の集計	見学・参加	会場の企画 会場設営・運営 一般投票の実施	見学・参加	資材の提供 試飲会の運営 店頭分の集計	店頭での一般 投票 賞の選出
11月29日	結果発表	講評と入賞作 品の店舗展示	授業内で 発表・講評	授業内で 発表・講評	授業内で 発表・講評	教員から個別に フィードバック	授業内で 発表・講評 賞品提供	(12月~) 無料引換券 の対応 入賞作の 店頭掲示

事前学習シートの共有を行った(図1)。各グループ のファシリテーションは3年ゼミ生が担当し、2年生 との顔合わせと交流の機会にした。

③ 地域視察:スーパーでのフィールドワーク

②のグループワーク後、オオゼキときわ台店へ移動し、10時開店の少し前から店内を見学させて頂いた。同社は、店舗単位で商品仕入れや販促戦略が任され、従業員オリジナルのPOPを制作することも少なくないという。比較的小さな店舗で駐車場がないことから、客層は徒歩か自転車で来店する近隣住民が中心である。開店して1年あまりであること、通学路と異なる通り沿いで店舗前を通る機会がないことなどから、初めて来店した学生もいた。店内を見学した後には、上階のバックヤードで店長から同店の特色についての話をして頂いた後、質疑応答の時間をとった。



図2 オオゼキときわ台店の外観



図3 オオゼキときわ台店での店頭視察の様子



図4 バックヤードでの店長との質疑応答

④ 背景理解:企業からのオリエンテーション

③のフィールドワーク後は、教室に戻りキリンビバレッジの各担当者によるオリエンテーションを行った。前半は、紅茶の有資格者による「午後の紅茶」に関する講義で、商品や茶葉の特色を学んだ後にジュースと割って楽しむアレンジティーも紹介された。後半は、オオゼキときわ台店の営業担当者から、飲料メーカーの立場での売り場づくりと広告POPについて具体例を交えて説明して頂いた。学生には、事後学習としてフィールドワークで気づいた点と広告POPの仮案をまとめてくることを課題とした。



図5 「午後の紅茶」についての講義



図6 広告POPについてのオリエンテーション

⑤ 広告制作:視察をふりかえり広告案を作成

②~④の翌週の授業では、視察で気づいた点をグループで共有しながら各自の広告案を練った。

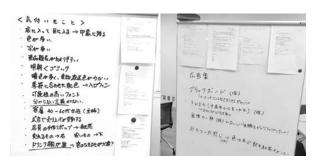


図7 視察のふりかえりと広告案の共有

⑥ 地域参加:大学祭で広告POPコンテスト&試飲会

広告POPコンテストには $1 \sim 3$ 年生から24作品のエントリーがあった(表3)。大学祭では学生ホールの一画に作品を一覧できるよう展示し、来場者による一般投票を行った。投票後に「午後の紅茶」のアレンジティーを楽しめるコーナーを設置したことで、家族連れの参加も多く盛況だった。投票者にはオオゼキときわ台店で作品が掲示される告知をし、同店で翌月に利用できる「午後の紅茶」引換券も配布した。また、淑徳祭の開催中はオオゼキ店頭での投票も実施した。



図8 淑徳祭での「午後の紅茶」コーナー



図9 「午後の紅茶」アレンジティー試飲の様子

⑦ 結果発表:講評と入賞作品の店舗展示

広告POPコンテストでは、一般投票510票(淑徳祭339票、オオゼキ店頭171票)が集まり、集計結果から最優秀賞1作品、優秀賞3作品、オオゼキ賞1作品が選出された。学生には、11月29日の授業の冒頭で結果発表とともにキリンビバレッジからの講評があり、入賞作以外の作品についても1作品ずつフィードバックを行った。入賞作品は、12月にオオゼキときわ台店の店頭で掲示された(図10)。

表3 「午後の紅茶」広告POPコンテスト作品一覧

揭示 NO	学科	学年		
1	表現学科	2年	午後の紅茶のこの女性、誰だか知っていますか?	
2	表現学科	2年	いつもの午後を、着飾る午後に。	最優秀賞
3	表現学科	2年	飲む英国	
4	表現学科	1年	紅茶で、一息	
5	表現学科	1年	赤は正義のストレート、黄色は勇気のレモン、白は優しさのミルク 今日はどれにする?	優秀賞
6	表現学科	1年	ひと休みしようよ	
7	表現学科	2年	スーツも脱いで、カバンも置いて、そっとひと息つきませんか。	
8	表現学科	2年	食後の一杯をたまには	
9	表現学科	2年	人生は甘くないと父に言われた。	
10	表現学科	2年	爽やかな舌触り	
11	表現学科	2年	BarTEAnder	
12	表現学科	3年	もう何度「午後」と言ったのだろう	
13	表現学科	3年	あ!また会いましたね。今日も私と一緒に休憩しませんか?	
14	表現学科	2年	君はどの紅茶(かのじょ)を選ぶ?	
15	表現学科	2年	そろそろ大人なあなたの休み時間	
16	表現学科	2年	手を伸ばしてひと息つきましょう。	
17	表現学科	3年	今日は何色?	優秀賞
18	表現学科	2年	ちょっとした贅沢、ほっとする幸せ。	優秀賞
19	表現学科	2年	午後ティーがあれば。	
20	表現学科	3年	穏やかなあなたの時間のそばに	
21	表現学科	2年	RELAX	
22	表現学科	3年	澄み渡るは、染み渡る	オオゼキ賞
23	表現学科	3年	ちょっと一息。あっと驚き。	
24	表現学科	3年	もう一度恋しませんか?	



図10 オオゼキときわ台店での入賞作品の掲示

3. 考察

3.1 企業ニーズを捉えた地域連携としての考察

今回の取り組みでは、地域における「午後の紅茶」の認知拡大・販売促進という共通のゴールがあったことで、PBLの内容決定や優先順位もおのずと明確にできた。結果、季節要因もあり単純比較はできないがオオゼキでの「午後の紅茶」の販売本数は11月度から12月度にかけて3倍以上に伸びた。大学祭で配布した無料引換券も配布数の3~4割が店舗で回収でき送客の可視化もはかれた。企業側の立場でのPBL協力のメリットは以下の点にまとめられる。

[飲料メーカーのPBL協力メリット]

- ・学生との取組みを通し、企業が目指すCSV (Creating Shared Value) 活動の実践・学びの機会となる
- ・顧客先に売り場づくりの新しい提案ができる
- ・試飲会を通じブランドファン形成ができる

[地域スーパーのPBL協力メリット]

- ・学生も含めた地域での認知度が上がる
- ・来客数や売り上げアップにつながる
- ・着目率の高い売り場づくりができる

3.2 学生の各学習プロセスでの学びについての考察

各学習プロセスで学生にどのような学びが生まれているかの確認として、毎回の授業でのリフレクションシートと最終レポートからの抜粋を次頁にまとめた。これらから読み取れる学習プロセスごとの学びのポイントを以下にまとめる。

[地域視察・背景理解(10月4日)での学び]

- ・日常的なスーパーという空間をあらためて観察する ことでの気づきが多く、実際に売り場づくりをして いる店長や店頭提案を行うメーカー側の話からも新 たな視点を得た様子が見られる。
- ・グループのファシリテーションを行った3年生は、 他学年との学生とともに意見をまとめて発表したこ とが良い経験となったとコメントしている。

[視察ふりかえり・広告案共有(10月11日)での学び]

・同じ場を視察しても人によって着目した点が異なり 気づいた点を共有したことによって、新たな発想を 得た学生もいた。

[結果発表と講評 (11月29日)、全体を通して学び]

- ・他の学生の作品を共有することを通して学んでいる 様子が見られた。
- ・多面的に物を観察し、常に「なぜ」と背景を考える ことが習慣化したという学生もいる。

このPBLに限らず、筆者が表現学科の授業で重視しているのは、M.レズニック(2007)が示した創造的な学びのスパイラル「クリエイティブ・ラーニング・スパイラル」(図11)である。他者とアイデアや着想を共有し合い、それを振り返ることによってさらに次のアイデアが生み出される好循環を示す。本PBLにおいても、作品案の共有や講評に時間を割いたことで、このスパイラルがまわせていたと考えられる。

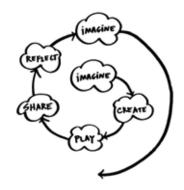


図11. クリエイティブ・ラーニング・スパイラル (Mitchel Resnick, 2007) [2]

学生のコメント

【10月4日 視察およびオリエンテーション】

- ・今回オオゼキまで行っていつもの客としての目線と 違う目線で見ると、見えてくるものがまったく違う と思った。
- ・オオゼキに行ってみてPOPにも種類があるなど、棚 などの陳列の法則なども知ることが出来ました。
- ・商品と関わる作品を作るのは初めてなので、普段と 気持ちが変わりました。実際に現場に出てアイデア を出す経験も初めてだったので新鮮でした。
- ・POPや商品の陳列、売り方、ターゲット層など、 ひとつ視点を変えて見てみると、発見や疑問が数々 にあがった。オオゼキさんのPOPには、オススメ の仕方やPOPの作り方にバリエーションがあり、 とても参考になった。
- ・「午後の紅茶」に関する知識だけでなく、POPを作る上でのポイントや売り場の様子を実際に知ることができたので非常に良い経験になったと思います。この機会に、自分なりの視点での作品を作れるようにしたいです。
- ・表現学科らしい授業で本当に楽しかったです。企業 の方々のお話を聞く機会からいろいろと学べること が多く、もっとこのような授業を受けたいです。
- ・実際にスーパーのオオゼキさんに行って、売り場や お客さんを見たことで、想定していたターゲットの 設定が変わったので、見に行けて良かったです。
- ・キリンビバレッジさんの前で調べたことを発表する のは緊張したが、思っていた以上にグループのみん なの意見をうまくまとめることができ、良い経験に なった。(3年ゼミ生)

【10月11日 視察ふりかえりと広告案の共有】

- ・広告案を共有することで、新しく思いつくこともありました。ターゲットの年齢や時間を考え、そこに刺さるようなものが作れるようにしたいです。
- ・広告POPはまだ方向性が考えられていませんが、 特別な才能やひらめきがあるわけではなくても広告 コピーは書けるという言葉に励まされました。
- ・私たちのグループで出なかった意見も他グループに 出ていたので、その意見をPOPに生かしたいと思 います。

【11月29日 結果発表と講評】

- ・広告ポスターは、ビジュアルからキャッチコピーまでラフ構成から練り固めたものだったので、着眼点について見てくださっていて嬉しかったです。貴重な体験の中で結果を出すことができて良かったです。
- ・他の学生の広告POPを見て、どの作品が店頭に貼られていてもおかしくないと思いました。似た作品もなく、それぞれが自分の強味で世界を作っていて、他の学生の完成を取り入れつつ、自分にしか作れないものを今後も作っていきたいと思いました。

【全体ふりかえり 学期末の最終レポートより】

- ・私がこの授業で学んだことは、物事への考え方や感性豊かに考えていくことだ。広告コピーのキャッチコピー案は、相手を引き寄せるためにはどうすれば良いのか、ポスターはどのようにすれば印象づけられるのか、試行錯誤の中から学んだ。
- ・授業内で様々な作品や他の学生の作品に触れて、いいなと感じた時に、なぜその作品をいいと感じたのか、「なぜ」を考える習慣がついたことが、この授業を通じての一番の変化です。「午後の紅茶」の広告POP課題では、ストーリー性のある文章を考えて、「午後ティーがあれば」日常が少し豊かになるという世界観を表現しました。結果的に、遠くから見るとインパクトに欠けた作品になってしまいましたが、それも良い学びになりました。他の課題も自分の持っているものや感性を活かして作ることができ、自信がつきました。
- ・日常を多角的な視点からあらためて観察することで、普段意識しない情景や情緒に触れ合うことは新しい発見に繋がる。そして、形にして他者と共有することで共感を得て、自分自身の感性に磨きをかける。「共感」と「共有」の双方があることによって、表現の場をより良い形で展開していくことができると考えることができた。企業と連携した広告POPの課題では、企業側の分析だけでなく、学外学習で売り手側の視点を知り、自ら分析を行う貴重な体験となった。大まかな要素から必要な部分を鮮明化することによって作品を作るという経験は、今回の課題だけでなく、今後の様々な出来事に応用していきたい。

表4は、一連の各学習プロセスが、本稿の冒頭で触れた「情報・知識リテラシー」育成の4つの観点のど

の部分に関与しているかをまとめたものである。学習 プロセスが多層的に重なることによって①~④を網羅 26 杉 原 麻 美

表4 各学習プロセスでの情報・知識リテラシー育成

学習プロセス	①情報の 知識化	②知識の 活用	③知識の 共有化・ 社会化	4知識の 組織化・ マネジメ ント化
広告学習 商品広告と広告 POP の基礎	0	0		
事前学習の共有 商品知識・情報 のグループ共有	0	0	0	
地域視察 スーパーでの フィールドワーク	0	0		
背景理解 企業からのオリ エンテーション	0	0		
広告制作 視察をふりかえ り広告案を作成		0	0	
地域参加 大学祭で広告 POP コンテスト &試飲会		0	0	
結果発表 講評と入賞作品 の店舗展示		0	0	0

したPBLの学習効果が期待できると考察できる。

また、今回のPBLでは正課科目と正課外活動を組み合わせることによって、学年間で交流したり他学年の作品から刺激を受けたりする機会を意図的に用意した。このような複数学年に渡る学習は、表現学科ではほとんどないが、他キャンパスや他学部では先行例が見られる。たとえば、千葉キャンパスのコミュニティ政策学部で行われているサービス・ラーニング、埼玉キャンパスの経営学部が2016年度から導入しているLA(Learning Assistant)プログラムが挙げられる。今後はそれらの取り組みを参考にしながら、学生が多層的に関わる学習についても検討していきたい。

4. まとめ

飲料メーカー(キリンビバレッジ)と近隣スーパー (オオゼキときわ台店)の協力を得て実施した今回の 地域連携型PBLでは、以下の点がポイントになった。

- ・「大学祭」の場を地域との接点として有効に活用し、 企業側の協力メリットにつなげられた
- ・「地域視察→背景理解→広告制作→大学祭→発表」 という一連の流れの中で学生が多面的に学んでいた 引き続き学部学科の特徴を生かしながら地域と連携 した取り組みについて検討し、学生の主体的で深い学 習の機会を広げられるよう実践を重ねていきたい。

謝辞

今回の取り組みでご協力いただいたキリンビバレッジの皆さま、オオゼキときわ台店の皆さま、学生支援部の堀江氏 吉川氏、キャリア支援室長・地域連携センター委員の生駒氏に深く感謝いたします。

注

1 淑徳大学人文学部表現学科准教授

引用文献

- [1] 溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂、2017
- [2] Mitchel Resnick "All I Really Need to Know (About Creative Thinking) I Learned (By Studying How Children Learn) in Kindergarten", Creativity & Cognition conference, June 2007 http://web.media.mit.edu/~mres/papers/CC2007-handout.pdf (2019年2月25日アクセス)

研究ノート

淑徳大生の板橋区赤塚支所・都市農業係と連携した 「農業体験」による気づき・学び

土 井 進1

要約

人文学部発足以来6年間にわたって継続している板橋区赤塚支所・都市農業係と連携した「農業体験」によって、学生がどのような気づきや学びを修得したかを、省察文を分析して考察した。その結果、地域の4世代の人びととのコミュニケーションの喜び、農作業の大変さと農業の大切さの実感、農芸指導員から教わった農作業のコツ、「都市農業」の魅力と課題に関する農芸指導員へのインタビュー調査結果を明らかにした。

1. 研究の目的

本研究は、人文学部発足以来6年間にわたって継続してきた「農業体験」によって、農業初体験の学生が何に気付き、何を学んだのかを、活動後に記述する200字の省察文を分析することによって明らかにする。また、仕事の合間に一人の学生が一人の農芸指導員に対面で実施したインタビュー調査によって、「都市農業」の魅力と課題について明らかにする。そして、これらの成果を根拠としてさらに一層「農業体験」を推進し、淑徳大学の地域社会への貢献を促進することを目的としている。

2. 研究の方法

「農業体験」の内容

月	「農業体験」の内容
3月	じゃがいもの種芋切り
3月	じゃがいも植え
6月	親子でじゃがいも収穫体験
7月	人参の種まき
9月	大根の種まき
9月	人参の間引き
10 月	大根の間引き
11 月	板橋農業まつり

研究の方法は、左の表.に示した様々な「農業体験」に歴史学科の1~4年生が、各回に3~10人参加し、活動終了後に記述した200字の省察文を研究資料として用いた。学生が初体験となる「農業体験」を通して、何に気づき、何を学んだかを5年間の省察文を分析して考察した。なお、学生の省察文を本研究の資料として活用することについては、学生の同意を得ている。

じゃがいもは6月に開催される「親子でじゃがいも 収穫体験 | に使用され、大根と人参は、11月に開催さ れる「板橋農業まつり」において、「親子大根・人参 引き抜き体験」において使用される。これらのイベン トには毎回、板橋区民の親子約400組が参加する。 じゃがいも・大根・人参は、商品作物として栽培され ているのではなく、次代を担う子どもたちの農業体験 用として栽培されている。ここに板橋区都市農業係の 施策の大きな特色がある。参加した親子は参加費を支 払うが、それは商品に対する代価としてではなく、 「農業体験」にかかる経費として徴収されていること を板橋区民はよく理解している。板橋区立赤塚小学校 の近くにある「農業体験農園」でこれらの作物は栽培 されている。学生はこの農園に朝8時30分に集合し、 都市農業係職員と農芸指導員の指導のもと「農業体 験」から様々な気づき・学びを修得する。「農業体験」 に含まれている自然体験・社会体験の内容を学生の省 察文を通して明らかにする。

3. 「農業体験」に関する先行実践との比較考察

(1) 先行実践に取り組んだ動機

先ず、人文学部歴史学科の学生に「農業体験」の場を提供しようとした動機は、以下のような出来事であった。1998(平成10)年版の学習指導要領において「総合的な学習の時間」が始まった。それを受けて1999(平成11)年7月、岩手県盛岡市でNHK主催のシンポジウム「土から学ぶ子どもたちの未来」が開かれた。パネラーの一人であったシンガーソングライターのイルカさんが、このテーマと盛岡の地域性を踏まえて尊敬されている宮沢賢治の詩を朗読された。それは次の「稲作挿話」⁽¹⁾ であった。

「これからの本統(ママ)の勉強はねぇ/テニスを しながら商売の先生から/義理で教はることでないん だ/きみのやうにさ/吹雪やわづかの仕事のひまで/ 泣きながら/からだに刻んで行く勉強が/まもなくぐ んぐん強い芽を噴いて/どこまでのびるかわからない /それがこれからのあたらしい学問のはじまりなん だ!

筆者は、この詩を初めて聴いて一大発心した。それは、20年以上教員をやってきたが、自分の教師としての在り方は、正しく賢治のいう「商売の先生」でなかったのかという自責の念であった。そこで、これからは一介の小作人となって、学生と共に総合的な学習を作りあげようと肚を決めた。JAながのから6年間放置された荒廃地を借り受けて、2000年3月に水田4a、畑8aの教育用農場を開墾した。2013(平成25)年度に退職するまでの14年間にこの農場で「農業体験」をした学生は、約3,000人にのぼった。

(2) 先行実践と赤塚支所都市農業係における「農業 体験」の相違

2014 (平成26) 年度に開設された淑徳大学人文学部に赴任した筆者は、着任早々4月に都市農業係を訪ね「農業体験」への学生の受入れをお願いした。その目的は、現代の学生に圧倒的に不足している自然体験、社会体験の場を「農業体験」に求め、淑徳大生が板橋の大地を踏みしめ、地域の人びとと交流することによって、逞しく成長することを願ったからである。すなわち、"人づくり"のための"土づくり"を志向したのである。

先行実践においては、JAながのを介して地主さんから大学が土地を借り受けたので、筆者は実質的な農

場経営者であり小作人であった。一方、「農業体験農園」は都市農業係が地主さんから土地を借り受け、農業指導は農芸指導員に委託して運営されている。このため学生と筆者は、農園管理には一切かかわらず都市農業係職員と農芸指導員から指導を受けているところに、先行実践との大きな違いがある。

4. 「農業体験」による学生の気づきと学び

(1) 地域の4世代の人びととのコミュニケーション の喜び

学生が農場で出会う人たちは、初めて出会う人ばかりである。しかし、長靴をはいて板橋の大地に立つと、不思議と連帯感が生まれてくる。70代~90代の農芸指導員さん、じゃがいも収穫体験、大根・人参の引き抜き体験を楽しみにして集まった板橋区民の親子、そして都市農業係職員さんと農業を共通の話題としたコミュニケーションの輪が広がった。板橋区にはどういう人が住んでいるのか、農業の専門家とはどのような人なのか、を実際の人びととふれあうことによって、学生は具体的に知ることができる。学生が地域の4世代の人びととのコミュニケーションを通して、気づいたり、学んだりしている事例を次に紹介する。

①男の子の笑顔によって「社会貢献」の意義を実感した学生

親子の大根・人参の引き抜き体験で男の子を担当した学生は、他者の「喜び」をわが「喜び」と感じることができた自己の成長を喜びとして、次のように記述している。

「普通に大学生活をしていたら、今回のような小さな子どもたちと触れ合う機会がなく、また、私はアルバイトを今まで一度もしたことがないため、このような機会でないとこのような社会体験ができないので、素晴らしい経験ができた。今回特に印象に残っている出来事は、太い大根が抜けない男の子だった。私はその子が大根を抜けるように周りの土を掘ったり、がんばれと応援したりした。15分かけてやっと抜いた時の男の子の最高の笑顔は、私が農業まつりに参加して良かったと思える笑顔だった。「農業体験」を実践することによって、私は本学の建学精神である社会貢献ということを、言葉としてではなく実感として学ぶことができた。」

②農芸指導員からの一番うれしかった言葉、「心強い味方だ」

大根の種まきと人参の間引き作業に2年続けて参加している学生は、この大根と人参が「板橋農業まつり」に用いられることを知っていた。そして次のように感じた。「都市農業係の職員や農芸指導員の方々の気合の入りようが違っていた。私も農業まつりに去年参加し、新しい見識を得ることができた。それ故、私も思うところがあったため、いつも以上に一生懸命に取り組んだ。一番うれしかったことは、農芸指導員の方に『心強い味方だ』と言われたことである。この一言を通して、私は自分自身が成長しているという実感を持つことができた。」

③笑顔で帰っていく親子のうしろ姿に労が報われる

生憎の雨の中での「板橋農業まつり」に参加した学生は、何のためにこんなことをしているのかと、嫌気がさしたという。しかし、与えられた任務に一生懸命に取り組み、とても充実した時間を過ごせたと言う。そして、雨にも負けず最後まで頑張ったことが報われる場面に出会った。「普段なかなか体験することができない農業を通して、子どもたちのたくさんの笑顔を見ることができた。正直、やっている最中はやめたいと思っていたが、来てくれた親子の皆さんが笑顔で帰っていくうしろ姿をみて、私のやったことが報われたように思った。大変な思いをしたからこそ、達成感も大きかった。」と記述している。

他者の「喜び」のために尽くすところに自身の「喜び」が返ってくるという社会貢献の根本的意義を感得しているものと言えよう。

(2) 農作業の大変さと農業の大切さを実感

「農業体験」そのものが初めてという学生たちが、真っ先に感じることは農作業の大変さである。じゃがいもを植える場合を例に説明すると、農芸指導員が耕運機をかけて、畝幅70cm、深さ15cmの溝を作る。学生は有機肥料と化学肥料を30cm間隔に一掴みずつ播く。そこにじゃがいもの種芋を置いていく。次に鍬を使って土を被せて作業が完了する。学生は種芋が入った重いバケツを提げながら、狭い畝の中を1個1個丁寧に置いていく。足の幅が1足分しかない畝を、中腰の状態で種芋を植えていくことは、慣れない学生にとって正に重労働であった。

このような「農業体験」を通して学生が学んだことを 3人の事例で紹介する。

①命のありがたさを実感

「板橋農業まつりに参加して、普段は体験できない畑仕事をした。畑には虫がたくさんいた。大根と人参は大きく育ち瑞々しかった。私は農業体験をしたことにより、命のありがたさを実感できた。普段何気なく食べている野菜も育てる人がいるからこそ食べることができる。収穫することだけでもとても大変だった。食べていけることに感謝しなくては、と改めて思った。板橋農業まつりではそのような大切なことを私は学んだ。」

②農業を将来の職業にしたいと思った

「農業体験を通して学んだことは、農業の本質や種まきから収穫までの厳しさである。農家さんや板橋区役所職員の皆さんが農業まつりを迎えるために、長い時間をかけて育てた大根や人参を、親子が収穫体験をするのを手伝ったことは、私の成長の糧になった。現在、農業者の人数は減少傾向にある。私は農業体験をやってみて、将来の職業にしたいと強く思った。板橋区の親子が大根と人参を収穫する農業体験は、本当に楽しかったし、農業の素晴らしさを感じた。」

③農家の苦労とやりがい

「板橋農業まつりでは、大根と人参の収穫体験のお手伝いをした。当日は天候が悪く、土も固くなっていたため、野菜の収穫が難しくなっていた。今まで、野菜の収穫を経験したことがなく、大根を引き抜けるかどうか不安だった。しかし、都市農業係職員からコツを教えてもらい収穫することができた。私は今までほとんど農業の大変さなど、よく分からなかったが、今回の体験を通して、農家の人の苦労とやりがいを理解した。」

④大地自然・他者・自分のつながり、天地人の交わり に気づく

「百聞は一見に如かず、といわれるが『農業体験』は、学校で机に向かって聞いているだけでは感じえない達成感・苦労などが味わえ、自分の中に経験として長く残すことができると思った。そして農業を経験して自然、他人、自分と向き合い、自分の足らない部分を見つけることができ、自分の成長につながったと思う。板橋の大地の上に立ち、4世代の人たちと共に汗を流していると、天地人の三才と交流している感覚を覚えた。」

(3) 農芸指導員から教わった農作業のコツ

学生たちは農芸指導員の輪の中に入って一緒に作業

をする。すると学生の鍬の使い方を見ては、こうすると良いと熟練の技が施される。この農場での学びは、説明を聞いてから行動するのではなく、行動しながら 実地の現場で即時に指導がなされる。次に学生が教わった農作業のコツを3例紹介する。

①迷うことなく種芋を切る秘訣

「ジャガイモの切り方がわからず、芽の出るエクボの所を探して目移りし、なかなか包丁を切り下ろせないでいた。この様子をご覧なった農芸指導員が、芽の出る所は何か所もあるが、ジャガイモの根が生えてくるお尻は1つである。このお尻を見つけてそこへ包丁を入れれば、両方に必ず芽が含まれる、という秘訣を教わった。農業の専門家の皆さんの中にボランティアとして参加し、種芋の準備をする体験をしたことによって、専門家から直接教わることができた。このような体験はまさに正統的周辺参加の学びであると実感することができた。

また、かつては切ったジャガイモの表面から細菌が 入らないように灰をつけたのであるが、今日の都会で は灰が手に入りにくいので、表面を1週間乾燥させ薄 い膜をつくって細菌が入らないようにしてから植える とのことであった。なるほどと感心した。」

②じゃがいもの畝を足踏みすることによって強い芽に する

「農芸指導員10名、都市農業係職員2名、学生・教員3名全員が鍬をもって、じゃがいもの畝に土をかぶせる作業をした。土がかぶさったからこれで完了かと思いきや、農芸指導員の会長がおもむろに畝の上にのって土踏みをされた。これに倣って全員が一畝づつ担当して麦踏みのように、ジャガイモの畝の土踏みを行ってから作業は完了となった。

なぜ、大事に植えた種芋の上を足で踏むのかと尋ねたところ、踏まれることによって芋はその圧力に負けまいとして芽を出すので、その芽がしっかりとするのだ、とのことであった。適度な圧力や負荷をかけることが、かえって種芋を大事にすることになるのだと教わった。これらの一連の農作業を体験して、改めて知らないことが多いなと実感した。」

③ペットボトルを使った大根の種を播くコツ

「大根の種まきを行った。大根の種まきをするために、まず初めに農芸指導員がマルチシートを張る専用の機械によって幅80cmの畝を作った。張られたマルチシートには機械によって30cm間隔に穴が2列にあ

けられていた。穴は直径10cmほどで、そこにペットボトルの底を押し当てて、人差し指の第一関節ぐらいまでの穴をあけるのだ。その穴に正三角形の位置に種を一つずつまいていく。なぜ3個まくのかというと、発芽しないものもあるので、芽が出たもののなかで一番丈夫そうなのを一本残して、後は間引きするのだということを教わった。この小さな一粒の種が、2か月後には立派な大根に成長するのだと思うと、ダイコンが秘めている生命力に感動した。」

(4)「都市農業」の魅力と課題に関する農芸指導員へのインタビュー調査

(調査の目的)人に歴史があるように、地域にもその土地ならではの歴史がある。私たちは、歴史を知るということ、人間を知るということは、土地を離れてはあり得ないと考えた。そこで文献による歴史学習とともに、「農業体験」を通してそれぞれの時代を生きた先人たちの息遣いを感じ取りたいと考えた。私たちは、農芸指導員さんと共に額に汗水流して「農業体験」をすることによって、長老たちから自己の人間形成に有益な糧を得たいと願った。

(調査の方法) 農作業の休憩時間に、板橋区民農園農芸指導員10名に、学生10名が一人ずつ付いて、板橋の「都市農業」の魅力と課題についてインタビュー調査を行った。農芸指導員の平均農業歴は38.3年、最長の方は74年、最短の方は3年で、60年以上農業に携わっている方が多い。

70歳近い農芸指導員A氏のインタビューを担当した 学生は、A氏から次のような具体的な回答を得た。す なわち、A氏は、板橋区赤塚の地で8代にわたって農 業を営む専業農家で、A氏ご自身は農業に携わって約 30年になる。A氏の畑では、春はジャガイモ、ダイコ ン、カブ、ホウレンソウなど、秋はニンジン、ブロッ コリー、カリフラワー、ハクサイ、レタス、タマネギ など様々な作物を栽培している。A氏が手にしている 鍬は親子3代にわたって使われ続けているもので、柄 の部分が黒光りしていた。また、鍬先の四角い鉄の部 分が、長年の重労働によって摩滅し、円くなってい た。

Q1.「都市農業」の魅力は何ですか?

A氏:大消費地があるので、収穫するとその場ですぐ 出荷できることです。また、畑は災害時に板橋区民の 避難場所として利用していただけることです。さらに 地域に畑の緑を残す役割を果たすことができることです。

Q2.「都市農業」の課題は何ですか?

A氏: 周りが住宅街なので、農薬等が撒けないことです。また、早朝からの農作業ができないなど、制約があることです。周りの住民の理解を得ていくことが必要です。後継者が不足していること、農業者が高齢化していること、都市化で畑が減少傾向にあること、税金(固定資産税)が高く経営が困難になっていることです。また、野菜が盗まれてしまうことも困った問題です。

Q3. 私たち学生へのメッセージをお願いします。

A氏:「農業体験」を通して、農業の大変さや課題等を理解してもらい、学生時代の貴重な経験にしてほしいと思います。健康にも良いので、もっと「農業体験」をしてみてください。土と接することは良い経験となり、達成感が得られます。野菜作りの楽しさを味わってください。もっと若い人たちに農業をやってほしいというのが願いです。

A氏にインタビューをした学生は、「実際の農業のほんの一部を体験したに過ぎないが、農作業には先を見越して考えなくてはいけないことがたくさんあることを学んだ。私は歴史学科なので「農業体験」を通して農民の生活にも興味を持つことができた。」と述べている。他の農芸指導員にインタビューをした学生は、次のような感想を記述している。

「農芸指導員さんの話を聞いていた時の感覚と、インタビューへの回答から農業に対する誇りが垣間見えた。そして、それを若い世代に受け継いでほしいという思いを回答から感じることができた。この「農業体験」を始めて3年になるが、こうして農芸指導員の方と1対1で話すのは初めてで、その思いを聞くことができたことは貴重な経験になった。」

5. 連携機関からの学生への励ましの言葉

(1) 赤塚支所長からの世代間の交流や新たなコミュニティー形成への期待

「淑徳大学の皆さんには、ボランティアとして、とうもろこしと大根・人参の収穫体験事業にご協力いただきました。農業者の高齢化、後継者の担い手不足は、板橋区においても切実な課題となっており、ボランティアの活用は、問題解決のひとつの手段となりえると考えております。今回の淑徳大学との連携の取り組みが、その契機となり、板橋の農業を支えていく原

動力となるよう、継続して研究を重ねていきたいと思います。

次年度以降についても、農業体験事業について、続けてご協力いただき、世代間の交流や新たなコミュニティーの形成にご貢献いただければ幸いです。赤塚支所都市農業係一同、一生懸命努めさせていただきますので、よろしくお願い致します。」⁽²⁾

(2) 都市農業係長からの人文学部との連携による文 化薫る板橋農業への期待

「板橋区では区民に、収穫体験を通して農業の恵みを実感し、都市農業の価値を理解していただくために、板橋区民農園農芸指導員(農業者)の方々にご協力を願い、農業体験事業を実施しています。この事業には淑徳大学の土井教授からご提案をいただいたことをきっかけとして、人文学部の学生の皆さんに農作業や実施運営のお手伝いをいただいています。この思いがけないボランティア作業に、高齢化が目立つ農芸指導員の皆さんはとても感謝されています。

私自身は、この4月に着任したため、まだ一年目の お付き合いですが、人文学の研究・学問に農作業がど のように関係するのか、どのようなメリット (効果) があるのか正直なところ疑問でした。そんなある日、 ジャガイモ栽培のための農作業を終えた後、農芸指導 員と教授や学生の皆さんが集っていた時、誰からとも なく、"村まつり"のことが話題になりました。農芸 指導員の口から「五穀豊穣」、「豊年満作」などの言葉 が出ると、学生からは「それ聞いたことがあります」 「五穀って何だっけ」などという声があげられていま した。みんなで同じ農作業をした連帯感のおかげか、 世代を超えた集いの空間がそこに生まれていました。 田植えを手伝い、用水を管理し、作物の育て方を教え 合い、皆で秋祭りを作り上げていく。農業は、日本の 文化や地域社会を形成してきたルーツと言っても過言 ではないと思います。板橋には、「田遊び」や「四つ 竹踊り」というような農業にまつわる伝統芸能もあり ます。こうした農業や行事を体験することによって、 教科書や文献、そしてネットには載せられていない、 一層深みを持った人文学を追究してもらいたいとい う、学生諸子に対しての土井教授の思いが込められて いるように感じています。農業分野において産学連携 というと、農耕技術や品種改良の技術部門の連携が思 い浮かびますが、板橋では、淑徳大学人文学部と連携 できることにより、文化薫る板橋農業を実現していく

ことができるのではないかと感じています」⁽³⁾

(3) 農芸指導員から学ぶ「来年こそは!」という強い気持ち

「昨年度から引き続きボランティアとして参加して いただいている学生さんは、だんだん農作業に慣れて きて、じゃがいもの植え付けから収穫、大根・人参の 種まきから収穫までを手際よく、楽しそうに作業して いる様子が見受けられました。今年度からボランティ アとして参加していただいている学生さんも慣れない 作業に戸惑いもあったと思いますが、そのような中で もテキパキと作業を行っていただき、大変助かりまし た。また、今年度は参加してくださる学生さんも増 え、より多くの学生さんとお話ができ、私たちも貴重 な経験をすることができました。今回のような板橋 区・淑徳大学の共生事業や親子を対象とした農業体験 を通じ、農作物をつくることの難しさや生産者の苦労 を知ることができ、農と食のつながりを実感すること ができるのではないでしょうか。さらに、自然の恵み に感謝する気持ちや食べ物を大切にする気持ちを育む ことにもつながると考えます。そのことに加え、環境 への配慮も考えていただけると、私たちとしても、こ のような取り組みを行っていてよかったと思います。

農業の最も大変なところは自然に左右され、人間の力でコントロールすることが難しい点です。毎年同じように作物を育成していても、天候によりうまくいかないこともあります。毎年同じ量の作物が収穫できるとは限らないのです。しかし、たとえ豊作ではない年だとしても「来年こそは!」という強い気持ちを持ち、私たち農家は日々農作業に励んでおります。」(4)

6. 歴史学科がなぜ都市農業係と連携するのか

「板橋農業まつり」に生憎の雨天にも関わらず、学生勇士6名が集まった。雨合羽に長靴の農家スタイルに着替えて、これから始まる大仕事に備えた。雨で土はぬかるんでいる。それにも拘わらず集まった6人の淑徳大生は実に頼もしかった。このような雨の中、ぬかるんだ畑に入ってなぜ農業体験をする必要があるのか。何が目的なのか、何の意味があるというのか、と問い質したくなる人もいるであろう。また、わざわざしなくてもよい苦労を、何を好き好んで農業なんかに関わろうとするのか、と嘲笑する人もあるであろう。

しかし、この問いに対する筆者の思いは、人間は大

地自然によって生かされているという揺るぎない哲学である。人間の生きる営みを支えてくれている農作物の生産を生業としておられる農芸指導員さんたちが、板橋の地で営々として約20haの畑を耕しておられる。大半は70代、80代の方々で、農作業によって刻まれたいぶし銀のような深い皺を湛えておられる。この人生の達人、先人たちから農作業の合い間に、農業の技術や歴史、喜びや苦労などの味わい深い話をお聞きしたいのだ。板橋の大地を先祖代々、何百年にもわたって耕してきておられる人々の足跡を偲び、大地に根差した歴史の研究に取り組みたいと願っているのだ。日本の農学博士第1号の新渡戸稲造博士は、博士論文である『農業本論』(5)の結論として次のように述べている。

天地 偽らず 農は天地に交わること 近し 故に 農は偽らず

地域社会との信頼の絆を築くことは容易なことでは ない。学生の泥まみれの努力によって、5年間にわ たって地域連携事業が受け継がれてきたことに深く感 謝している。

7. まとめ

人文学部歴史学科の学生有志は、学部創設以来6年間にわたって板橋区赤塚支所・都市農業係と連携し、「農業体験」に取り組んできた。この取り組みは、正課外の社会貢献活動として実施されており、学生たちには単位にもならないし、アルバイトにもならない。それにも関わらず、学生は遠路、東武東上線「成増」駅から徒歩で朝8時30分に間に合うように「農業体験農園」に集合する。ここで都市農業係職員と農芸指導員の指導を受けて「農業体験」に熱心に取り組んだ。長靴を履いての慣れない仕事に歯を食いしばりながら、学生たちが自然体験と社会体験を積み重ねることによって修得した気づきと学びは、次の4つであった

- (1) 地域の4世代の人びととのコミュニケーションの喜び
- (2) 農作業の大変さと農業の大切さの実感
- (3) 農芸指導員から教わった農作業のコツ
- (4)「都市農業」の魅力と課題に関する農芸指導員 へのインタビュー調査

また、連携機関から学生に寄せていただいた温かい励ましの言葉を3例紹介させていただいた。淑徳大学は長谷川良信先生の創立精神に基づき、教育・研究と並んで、地域貢献・社会貢献を重要な機能と位置付けている大学である。板橋区に立地している人文学部に学ぶものとして、板橋区との連携の道を大事に積み重ねていきたいと念願している。

謝辞

学生による「農業体験」を実りあるものにさせていただいているのは、受け入れてくださっている赤塚支所都市農業係の職員、並びに農芸指導員の皆様のご理解とご協力、ご指導あってのおかげであります。ここにご関係の皆様に厚く御礼申し上げます。

英文タイトルは、総合福祉学部のSusan Williams教授にご 指導を受けました。ここに記して感謝の意を表します。

注

1 淑徳大学人文学部歴史学科・教授

引用文献

- (1)草野心平編(1967)『日本詩人全集20 宮沢賢治』新潮社
- (2) 元赤塚支所長・小島隆夫「板橋区の農業事業について」、 土井進編著『平成26年度 (2014) 淑徳大学「アクティ ブ・ラーニング」報告書』創刊号、p.8
- (3) 元赤塚支所都市農業係長・小林慶昌「文化薫る板橋農業を目指して」、土井進編著『平成27年度(2015) 淑徳

大学「アクティブ・ラーニング」報告書』第2号、p.4

- (4) 板橋区民農園農芸指導員の会長・田中耕太郎「農業の大切さを知っていただきたい」、同上書 p.5
- (5)『新渡戸稲造全集』第2巻(1969)、教文館

参考文献

- 土井進(2005)「環境教育としての総合演習―信大茂菅ふる さと農場における"米づくりと人づくり"―」佐島群巳編 著『エネルギー環境教育の理論と実践』pp. 19-26
- 水田は生き物が生育する絶好の環境であることが分かった。 土井進(2005)「体験力を育てる農業学習」『教育展望』通巻 557号、pp. 24-33、教育調査研究所、学生や子どもが「信 大茂菅ふるさと農場」で陶冶した体験力として、①土や生 き物とのふれあいによる豊かな感性の醸成、②様々な人々 とのふれあいによる社会力の向上、③米づくり体験による 食べ物への感謝の念、④克己心の陶冶の4点をあげた。
- 土井進(2009)「『信大茂菅ふるさと農場』を教材とした総合 演習(米づくりと食育)の実践」『教材学研究』第20巻、 pp. 209-211、日本教材学会
- 土井進編著(2014)『信大茂菅ふるさと農場― "人づくり" への挑戦―』信州大学教育学部、全112頁、"土づくり" による"人づくり"を体験した卒業生は3,000名を超え、全国各地のそれぞれの勤務校において、地域と連携した生活科や総合的な学習の時間の実践に取り組んでいる。

"Shukutoku University Students' Impressions and What They Learned From Their Agricultural Work Experience in Conjunction With the City Agricultural Representatives at Itabashi-ward, Tokyo"

SUSUMU Doi

報告

介護人材の確保・定着の促進

―介護ロボット活用状況調査と千葉介護ロボットフォーラム報告書―

藤野達也1

我が国の急速な高齢化の進行に伴い、団塊の世代がすべて75歳以上となる2025年には、全国で38万人の介護人材が不足すると推計されている。千葉市では介護人材が4千人不足すると見込まれており、それを補うために介護ロボットの普及や外国人材の活用などの政策を推進することとされている。

特に介護ロボットの活用は、介護人材の職場における職員の負担軽減につながり、3Kといわれる職場環境を改善する可能性を秘めている。千葉市においてもこれまで福祉施設に介護ロボット(機器)の助成を行ってきたが、介護人材の定着を図るためにはさらなる普及が必要である。

淑徳大学では、千葉市との包括連携に関する協定締結に基づき様々な連携事業を行っているが、「介護人材の確保・定着の促進」の事業として平成30年度において、これまで助成してきた介護ロボットの活用状況を調査し、介護ロボットフォーラムにて報告することとなった。

1. 介護ロボット活用状況調査について

介護ロボットは、日常生活支援における移乗介護、移動支援、排泄支援、見守り・コミュニケーション、 入浴支援、介護業務支援のいずれかの場面において使用され、介護従事者の負担軽減効果のあるものとされている。その中で千葉市内の助成を受けた施設の中で市の担当者と特徴あるロボットを導入している3施設に現地調査を実施した。

2. 老人保健施設 A施設

① 介護ロボット製品名と設置費用

眠り SCAN を10台導入、費用は初期投資として1マットが10万円、パソコンなどのシステムが数十万必

要である。有線での使用も可能であるが、Wi-Fiのシステムの導入が必要となり、A施設においてはWi-Fi設置工事で150万かかったという。市からの助成は約100万である。

② 製品の特徴

本製品の特徴として以下のことがあげられた。

- ・転倒リスクのある方の眠り状態を計測し、覚醒時に 声かけをしてトイレ誘導をできる。
- ・個人の情報は、夜間帯など個人の覚醒の傾向が分か るため日中の活動と夜間との睡眠の関係などの分析 ができる。
- ・昼間の活動にとって睡眠状況が把握できるため眠剤 の量を調整できる。
- ・日々のエピソードと睡眠の関係が分かるため、家族 に日々の状況を示して説明できる。特に家族の面会 後の夜間は興奮して寝ていないとか、昼間の活動と 夜間の睡眠の特徴との関係が分かる。実際にはよく 寝ていたり、また逆に寝ていると思っていても覚醒 している時もある。
- ・個別の設定もでき、設定は比較的容易である。
- ・夜間帯にベッドから離れた記録も残るため、転倒な ど状況証拠も残る。日々の状況についてはタブレッ トで情報を得る事ができる。

③ 介護ロボットの使用状況

現在、導入10台が稼働中である。

④ 対象者

現在設置数が10台と少ないため対象は寝たきりでは なく、認知症の方を中心とし、ナースコール押せない 方でトイレ誘導とか必要な方としている。

⑤ 使用に関する効果と課題

導入の効果として転倒が減った。また、ステーションの前にベッドを出して見守っていた方が部屋にもどることができた。また、夜間帯に職員数が少ない時に効率よく巡回ができたこと、離れた場所においてもタブレットで確認できるようになった。

⑥ 将来性と今後の活用

今後も助成を受けられる場合さらに6台ほど導入したい。特に新規の利用者の夜間の状況や状態の悪い方に対する状態の変化を察知したいとの事であった。

⑦ その他

その他、介護機器として記録システムを導入されており、音声入力や選択式での入力、さらに利用者一括入力も可能である。なお、本記録システムは現在眠りSCANとシステムが連携しだしており、将来はそれぞれのデータ共有できるようになる。

また、介護の技術の習得として腰痛にならないような介護を行っており、スライディングボードなどを活用している。



3. 老人保健施設 B施設

① 介護ロボット製品名

OWLSIGHT 福祉用。値段は税込みで90万円程度である。

② 製品の特徴

本製品はベッド全体を見守り、直接居室に行かずと も他の業務を行いながら、専用スマホで動きやベッド 上の様子など安全確認ができるため夜勤者のストレス 軽減に役立つものである。当機器は、転倒のリスクの ある時や呼吸状況が変化した時に警告をしてくれる。

③ 介護ロボットの使用状況

今現在対象の方はおらず使用されていない。

④ 対象者

完全に認知症の方の対応は難しい。対象としては自 分のことは自分で出来る方で、ナースコールを職員に 気兼ねして押してくれない方が対象という。認知症の 方などは歩き出してしまってからアラームが鳴るため に利用は難しい。転倒のリスクがあるが、職員に遠慮 してしまう方などの利用が効果的である。また、コ ミュニケーションが取れて、さりげなく見守る必要が ある方の利用が効果的である。

さらに、呼吸の動きが感知できるため、看取りケア の方や、夜間など動きを解析する上では利用できる。

⑤ 使用に関する効果と課題

ギャッチアップも反応してしまい、ベッドを少し動かすだけでも調整が必要となる。調整はサービスマンを呼ぶか保守契約をしてインターネット経由で調整してもらうことが必要である。多少の調整はスマホで微調整が可能だが、大幅な調整は専門の方の調整が必要となる。利用者個々の状態にあわせて細かく設定する必要があり反応が細かく、感度が良すぎて細かくちょっと寝返りをしただけでも反応してしまう。反応する時間帯も設定できるが、今度は歩き出しても気付かないことになる。日差しがあるときは、エラーになる可能性がある。

また、こまかな調整が必要なため居室の移動が難し く、ショートスティなどの利用者だと難しい。居室変 更などの場合や全く理解力のない方の利用は難しい。

⑥ 将来性と今後の活用

使いこなすと効果的であるが、現場の人間が容易に 使えるような機械の改良が求められる。その点につい ては業者に伝えているという。台数を増やしてやって みようという要望は現場からあがっていない。

⑦ その他

隣接するの特養では移動用のリフトを使用してい

る。値段的には10数万円。週2回ほど、1回あたり3-4人を利用している。習慣付けていかないと使わないようになるため、職員に対する意識付けが必要である。全体で14-5人は利用している。対象は体の大きい小さいは関係なく完全な寝たきりの方となる。体が拘縮している方は使いづらい。



4. 特別養護老人ホーム C施設

① 介護ロボット製品名

ハル(市からの貸し出し)、費用は200万程度

② 使用頻度と使用状況

主に使用するスタッフを決めてモデル的に実施している担当者は毎回使用している。使用場面は移乗介助、トイレ介助なの時に常時装着、機器自体の装着には2-3分で装着できる。ずっと付けていると重さは感じるという。

③ 対象者

移動介助や排泄介助が必要な方など様々な利用者を 対象と出来る。但し、リフトと異なり、介助者の腰の 負担を軽減する補助的なものであり、体格が大きい方 や四肢麻痺の障害の方の場合は負担がある。

④ 使用に関する効果と課題

効果は特別すごく負担軽減につながったというところまではないが、座っている状況から立ち上がり動作、中腰の状況では腰への負担を軽減できる。また、他のロボットスーツに比べて動作性には優れており、介助中に常時装着していても時に問題はない。

ただ、1台の値段が約200万と高く、保守の軽費も 月々かかるため、多量に導入することは難しい。ま た、その日の中で使い回しは難しい。

⑤ 将来性と今後の活用

腰痛での離職者を減らすために数台導入を検討しているが、購入費が高いために躊躇される。コストが下がるとか、レンタルでの導入であれば普及する可能性があると考えられる。

⑥ その他

法人内の障害者施設ではリフトを使用されている。 四肢麻痺など完全に立位が取れない障害者で、体の大きな方は、2人介助でも腰への負担が大きい為有効である。しかし、高齢者施設においては、まだ大正生まれなどで体が小さい方などが多く、まだ介助で何とか対応できる可能性がある。しかし、今後体格的に大きな方が多くなってきて、使わざるを得ない状況になってくるであろう。



5. 介護ロボット導入の課題

以上の3施設に対する調査のほかに、先駆的に見守りロボットである「眠りスキャン」を全利用者のベッドに設置している他市施設、市の助成ではないが独自に「ネオスケア」を導入している施設、さらにノーリフティング宣言をしている高知県の施設が使う「スカイリフト」の活用状況を視察した。

その結果、千葉市の介護ロボットの活用において は、まだまだ十分に活用されていたとはいい難く、今 後の導入においては以下のような課題が明らかになっ た。

1) ロボット導入コスト

介護ロボットの単価が高いために、導入すること に躊躇するため、行政による助成により、試験的に 導入し、職員がその効果を感じられるようにする必 要がある。そして多くの施設において利用される様 になるとコストも低下すると思われる。

2)機能性

現場と開発者のミスマッチがあり、設置が難し かったり、機器が大きくて使いづらいなどがあげら れた。介護する上で小型化などの工夫が必要なもの もある。

3)操作性

機器の操作が複雑で、使用する職員が設定や操作 に慣れずに、有効に活用できていないものもあっ た。使用する職員が分かるように定期的に研修を行 注 うことやロボット自体の操作を簡便にする工夫も必 1 淑徳大学総合福祉学部教授 要であろう。

4) プライバシーへの配慮

見守りロボットなどは、機種によっては利用者が 生活を見られているという意識をされることもあ り、プライバシーへの配慮も必要となる。

5) 職員の意識の改革

ロボットを活用するためには、職員の意識を変え ることが必要で、そのための継続的な研修が求めら れる。

以上、本件に関しては、平成30年10月30日に行われ た「千葉介護ロボットフォーラム」において 「介護 事業運営における人材確保と介護ロボットの活用の課 題」というテーマで講演を行った。

活動報告

2018年度地域連携センター 事業報告

I. 大学地域連携センターの取り組み

1. ちば産学官連携プラットフォームの設立

(1) ちば産学官連携プラットフォーム設立経緯

大学地域連携センターでは、2016年度より、地域連携プラットフォームの構想に取り組んできた。2017年1月31日に開催された「千葉市・大学連絡会議」の幹事会では、本学から、医療・福祉、子育て、若者の就労、障がい者のケア、生活アメニティなど、あらゆる分野において、千葉市と近隣自治体、大学、産業界、金融機関等と連携し、生活圏としての質を高めていくための取り組みを進めることを想定した「「幸せ生活経済圏」プラットフォーム」構想を発表した。

その後、千葉市内の複数の大学と意見交換を行い、 千葉市内の大学・短大による産学官連携プラット フォーム形成の準備を進めることとなった。2017年11 月9日に開催し、敬愛大学と神田外語大学と本学は、 準備会議を淑徳大学、敬愛大学、神田外語大学の三者 が呼びかけ人となり、翌年1月29日に「千葉市内大学 間研究会」(淑徳大学千葉キャンパス)を発足させた。 ここでプラットフォームの基本的な枠組みを確認し た。当日の参加校は、植草学園大学、神田外語大学、 敬愛大学、淑徳大学、千葉経済大学、千葉経済大学短 期大学部、千葉明徳短期大学、帝京平成大学、東京情 報大学、放送大学の計10校であった。またオブザー バーとして千葉市役所に参加いただいた。会議では、 矢尾板淑徳大学地域連携センター長から「千葉市にお ける産学官連携を通じた地域プラットフォームの形成 について」をテーマとして、千葉市の現状と課題を確 認した上で、「千葉市の魅力を高める教育と経済の好 循環」と「人生100年時代における教育と地域の好循 環」を生み出すため、産学官連携を通じた地域プラッ トフォーム形成の必要性について説明するとともに、 地域プラットフォームへの参加の検討を依頼し、市内 の高等教育機関の参加を得た「地域連携プラット フォーム」に発展させていくこと、継続的に「千葉市 内大学間研究会」の取り組みを進めていくことについ て合意を得た。

第2回「千葉市内大学間研究会」は、2018年5月23日に敬愛大学で開催され、神田外語大学、敬愛大学、淑徳大学、千葉経済大学、千葉県立保健医療大学、千葉明徳短期大学、帝京平成大学、東京情報大学、放送大学の10校が参加するとともに、オブザーバーとして千葉市役所、産業界からイオンカルチャー株式会社、株式会社NTT東日本・南関東千葉事業部、株式会社千葉銀行、千葉商工会議所、千葉日報株式会社、ビュー・トランセホールディングス株式会社の6社の担当者に参加いただき、自治体、産業界からの意見も聴取した上で、「ちば産学官連携プラットフォーム」の基本方針案を固めた。そして、2018年8月9日にちば産学官連携プラットフォームの設立総会を開催し、ちば産学官連携プラットフォームが正式に設立された。

(2) ちば産学官連携プラットフォームの設立

2018年8月9日にTKPガーデンシティ千葉にて、ちば産学官連携プラットフォームの協定締結式及び設立総会を開催した。協定は、植草学園大学、植草学園短期大学、神田外語大学、敬愛大学、淑徳大学、千葉経済大学、千葉経済大学短期大学部、千葉明徳短期大学、帝京平成大学、東都医療大学、放送大学の11大学・短期大学間で締結された。協定書では、「それぞれの大学等における教育・研究等の特色を尊重し、相互に連携・協力することで、教育・研究の質的向上に資するとともに、地域社会の振興へ貢献することを目的とするプラットフォームの設立のために、次の事項について合意に達したのでここに包括協定書を取り交わす」とされた。

協定締結式の後、設立総会が開催され、総会にて、 ちば産学官連携プラットフォームの会長に、本学の磯 岡哲也学長が選出された。副会長には三幣利夫敬愛大 学学長、理事に佐久間勝彦千葉経済大学・千葉経済大 学短期大学部学長、理事に來生新放送大学学長、中澤 潤植草学園大学・植草学園短期大学学長、中條俊夫東 都医療大学学長、宮内孝久神田外語大学学長、監事に 冲永寛子帝京平成大学学長、金子重紀千葉明徳短期大 学学長がそれぞれ選出された。また運営委員会委員長 に本学の矢尾板俊平学長特別補佐が指名された。

(3) 千葉市、千葉商工会議所との協定締結

ちば産学官連携プラットフォームでは、市と産業界 との連携を推進するために、千葉市、千葉商工会議所 とそれぞれ包括連携協定を締結した。

2018年9月13日には、「千葉市とちば産学官連携プラットフォームとの包括的な連携」が締結された。本協定の目的は、「千葉市とちば産学官連携プラットフォームの両者が、包括的な連携により、広範な分野で、地域社会の発展に寄与すること」であり、この目的を達成するために、以下の事項について連携を行っていくことが確認された。

- ①千葉市の施策推進や課題解決に関すること。
- ②学生の就労支援に関すること。
- ③人生100年時代に向けた生涯学習や社会人の学び 直しの機会の提供に関すること。
- ④人材の育成に関すること。
- ⑤その他前条の目的を達成するために必要な事項に 関すること。

2018年9月19日には、「千葉商工会議所とちば産学官連携プラットフォームとの連携に関する包括協定」が締結された。本協定の目的は、「千葉商工会議所とプラットフォームが幅広い分野において、密接な協力と連携により、大学の連携組織という特色を活かしつつ、市及びプラットフォーム並びに地域社会の発展に寄与すること」であり、この目的を達成するために、

相互の人材、施設、情報等の活用について連携することが確認された。

(4) 私立大学等改革総合支援事業への申請

ちば産学官連携プラットフォームが設立されたことにより、2018年度私立大学等改革総合支援事業タイプ 5 (プラットフォーム形成)の「スタートアップ型・都市型」に申請することが可能になった。申請作業は、本学地域連携センターが幹事となり、ちば産学官連携プラットフォーム参加校(申請校:6大学・短大)と連携、協力し、申請を行い、2019年2月に選定されたことが文部科学省のWebページで公表された。

2018年度の私立大学等改革総合支援事業タイプ 5 (プラットフォーム形成)の選定状況は、以下の表の 通りとなった。

本学は、上述のように、「スタートアップ型・都市型」で申請したので、申請プラットフォーム数は5プラットフォーム、うち選定されたプラットフォームは3プラットフォームであり、選定率は60.0%であった。

(5) 2018年度の運営委員、事務局、部会構成員

ちば産学官連携プラットフォームの取り組みを推進 するために、千葉キャンパスからの協力を得て、以下 のメンバーを運営委員、事務局、部会構成員として委 嘱し、プラットフォームの運営に支援・協力を頂いて いる

○運営委員会(委員長)

矢尾板俊平 (学長特別補佐、大学地域連携センター 長、コミュニティ政策学部教授)

○事務局

森 敦 (千葉キャンパス総務部)

表 2018年度の私立大学等改革総合支援事業タイプ5(プラットフォーム形成)選定状況

			申記	青数			選別	主数			選足	 È率	
		発展型 I	発展型Ⅱ	スタート アップ型	合計	発展型 I	発展型 Ⅱ	スタート アップ型	合計	発展型 I	発展型 Ⅱ	スタート アップ型	合計
	地方型	4	7	16	27	4	4	7	15	100.0%	57.1%	43.8%	55.6%
プラットフォーム数	都市型	3	4	5	12	3	2	3	8	100.0%	50.0%	60.0%	66.7%
	合計	7	11	21	39	7	6	10	23	100.0%	54.5%	47.6%	59.0%
	地方型	25	25	69	119	24	7	35	66	96.0%	28.0%	50.7%	55.5%
大学等数	都市型	57	34	37	128	23	16	29	68	40.4%	47.1%	78.4%	53.1%
	合計	82	59	106	247	47	23	64	134	57.3%	39.0%	60.4%	54.3%

(出所) 文部科学省WEBページ

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shinkou/07021403/002/002/1340519.htm

○教育活動連携事業部会(幹事)

大友伸哉 (千葉キャンパス学事部 (学生サポートセンター))

松野由希(コミュニティ政策学部助教)

山本 功(コミュニティ政策学部教授)

○学生募集連携事業部会

青柳涼子(コミュニティ政策学部コミュニティ政策 学科長、准教授)

伊皆修一(千葉アドミッションセンター(入試課) 課長)

○就職支援連携事業部会

石坂雄樹 (淑徳大学学事部 (キャリア支援室センター))

伊藤潤平 (コミュニティ政策学部助教)

○生涯学習連携事業部会

都外川哲(大学地域連携センター)

日野勝吾 (コミュニティ政策学部准教授)

○地域支援連携事業部会

本多敏明 (コミュニティ政策学部准教授)

松崎 滋 (学事部 (地域連携室) 課長補佐)

村上 玲 (コミュニティ政策学部助教)

※肩書きは、2019年3月末時点

2. 履修証明プログラム事業

2007年の学校教育法の改正により、「履修証明制度」が創設された。これは、大学等の積極的な社会貢献を促進するため、学生を対象とする学位プログラムの他に、社会人等の学生以外の方を対象とした、120時間以上の一定のまとまりのある学習プログラム(履修証明プログラム)を開設し、その修了者に対して法に基づく履修証明書を交付できるという制度である。

本学では、2016年度の教育改革推進事業「魅力ある地域連携教育プログラムの開発と本学独自の履修証明プログラムの設計」(取組責任者:矢尾板俊平)において、本学における履修証明プログラムの可能性と具体的なカリキュラムを検討してきた。また、生涯学習や社会人の学び直し事業の一環として、授業開放講座等の取り組みも進めてきた。

人生100年時代において、リカレント教育とは「学 び直し機会の提供」ではなく、「生涯学び続けること ができる環境の提供」であり、大学は、18歳人口の学 生だけではなく、多様な世代の学修者が学ぶことがで きる環境を提供することが求められる時代となった。

そこで履修証明プログラムを、本学の第三の使命として、社会貢献事業と位置付け、社会人の方の学修機会の提供、キャリアアップ等に向け、授業科目や講習、公開講座を用いた体系的な教育プログラムと位置付け、修了者に履修証明書を交付することができる制度とした。

2018年度では、2019年度から本学の履修証明プログラムを千葉キャンパスでの試行を可能にするため、履修証明プログラム規程及び履修プログラムの要項を作成するとともに、他大学の履修証明プログラムに関する調査を実施した。

3. 共同研究

大学地域連携センターでは、2017年度末より、自治体コンシェルジュ協議会と連携し、「地方創生及び自治体が抱える課題に関するアンケート調査」に関する調査設計を行い、全国の自治体を対象に、アンケート調査を実施した。

2015年度から、国や全国の自治体は地方創生事業を 推進してきた。その中で、地方創生施策の進捗状況、 課題を明らかにするとともに、大学等の高等教育機関 や民間企業が公民連携・共創の枠組みの中で、どのよ うな役割を果たすことができるかということを明らか にし、今後の地域連携・社会連携の方向性を検討する ことが目的である。

アンケート調査の設計においては、大学地域連携センター、ジャパンシステム株式会社、株式会社JTBと産学連携の形で協議を行った。

アンケート調査では、以下の分野について質問項目を設定した。①大学との連携について、②地方創生の施策について、③移住定住施策について、④観光振興施策について、⑤業務改革推進施策について、⑥情報セキュリティ関連施策について、⑦公共施設マネジメント施策について、⑧起業家育成支援、事業承継支援について、⑨生涯学習や社会人の学び直し支援について、の9分野である。

全国の自治体に郵送方式でアンケート調査を実施したところ、有効回答数は627自治体(回答率:36.0%)となった。

4. 自治体との連携事業

千葉市との包括連携協定に基づき、千葉市の地域運営委員会の設立及び活動支援のため、研修会等に講師の派遣を行った。梅本陽子氏(元三重県松阪市役所職員)大学地域連携センター客員研究員に主講師を委嘱し、担当いただいた。三重県松阪市では、地域運営組織である「住民協議会」の取り組みを推進してきており、梅本氏には、松阪市職員として地域づくりに関わってきた経験を踏まえ、千葉市内の地域運営委員会に関する研修会にて講演等を依頼した。

日 程	訪 問 先	講師
7月14日 (土)	生実町合同会議	梅本客員研究員
9月6日 (木)	千葉市職員研修	梅本客員研究員
10月20日 (土)	生実町合同会議	梅本客員研究員
10月31日 (水)	真砂地区地域運営委員会	梅本客員研究員
11月25日 (日)	中央区星久喜地区地域運営委員会研修会	梅本客員研究員
11月26日 (月)	美浜地区地域運営委員会役員研修会	梅本客員研究員
3月2日(土)	花見川区区民対話会	矢尾板センター長

Ⅱ. 各キャンパスでの取り組み

1. 千葉キャンパス、千葉第二キャンパス

(千葉キャンパス)

千葉キャンパスでは、コミュニティ政策学部の「実 践科目」において、サービスラーニング教育が取り組 まれている他、多様な正課外活動やボランティア活動 がコーディネートされ、多くの学生が地域連携・社会 連携の活動に参加をしている。また、学生・教職員が 地域活動に参加し、地域に貢献するだけではなく、地 域(自治体、産業界も含む)の関係者の方々には、学 生の学びの場を提供し、共に学生を指導していただけ るという双方向型の関係性が構築されていることが大 きな特色である。すなわち、千葉キャンパスにある サービスラーニングセンター、地域連携室(地域支援 ボランティアセンター千葉)が中心となり、地域(自 治体、産業界も含む)と大学・学生が共に歩み、共に 課題を解決し、共に成長する、「利他共生」、「感恩奉 仕」という建学の精神を体現することを目指す環境作 りが進められている。2018年度には、総合福祉学部と コミュニティ政策学部の両学部において、教職協働の

「地域支援連絡会議」が立ち上げられ、教育研究活動 と地域・社会貢献活動をつなぐ体制が整備された。

また、千葉キャンパスでは、生涯学習や社会人の学 び直しの取り組みの一環として、正課科目の授業を開 放する「授業開放講座」が行われている。2018年度 は、前期22科目、後期22科目で行われた。

(文責:矢尾板俊平)

(千葉第二キャンパス)

千葉第二キャンパスでは、平成30年度で6年目となったボランティア講座における活動が地域連携・社会連携の中核となっている。これは、看護栄養学部の地域連携委員会と松ケ丘中学校地区の諸団体や住民が連携し、学生が地域でのボランティア活動を通して、共生の理念を具現化し、将来のボランティア活動に自ら参画・企画する能力を培うことを目的する事業であり、例年「ボランティア講座・地域連携事業報告書」として、活動の総括を行っている。

ボランティア講座で実践した主な活動は以下のとおりである。

- ・淑徳オレンジカフェ(認知症カフェ)(全11回)
- ・松ケ丘中学校区「子ども食堂」(全6回)
- ・松ケ丘ふるさと祭り、こども110番協力家庭の訪問 他

この他に、松ケ丘地区との連携において、教員による健康教育・栄養講話を全18回行った。

平成30年度で第9回目となった千葉東病院との連携 事業「腎臓にやさしい減塩料理教室」は、例年どお り、慢性腎疾患等で減塩を必要とする患者や家族が キャンパス内の調理実習室を利用し、調理実践を通し て栄養食事指導を得る機会となった。

また、平成30年度からの新規事業として、「健康フェスタ」を開催し、身体計測、血糖値チェック、AGEs測定、学生と教員による健康相談等の機会を提供することで、地域住民の健康づくり支援と、教育研究活動の一端を地域に還元する取り組みを行った。次年度の実施にあたっては、集客に向けたプロモーションが検討課題となる。

この他に、キャンパス施設利用による社会連携として、川戸地区の敬老会会場に学生食堂を提供し、川戸地区の高齢者の長寿を祝う会として、地区の児童・生徒がお祝いに集い、広く淑徳大学千葉第二キャンパスを認知してもらう機会となった。 (文責:岡澤順)

(1) 自治体との連携事業について

千葉キャンパスでは、千葉市との包括連携協定に基づき、2018年度には以下の事業が実施された。

「①パラスポーツ講座・交流会の開催など共生社会 の実現に向けた取組み」については、龍澤祭に合わ せ、ブラインドサッカー体験による交流会が開催され た。また3月には長谷川良信記念・千葉市長杯車いす バスケットボール全国選抜大会が開催された。本大会 は、今年度で8回目の大会となった。「②中央区のま ちづくりに関する協働・参画」では、千葉市中央区役 所と連携し、2月14日に蘇我中学校地区との意見交換 会が開催された。意見交換会では、「防災・減災と地 域活動」と「食事サービス」の2つをテーマについ て、グループディスカッションが行われた。「④看護・ 介護・福祉分野等における新製品開発に対する助言・ 評価」では、介護ロボットをテーマに調査研究が進め られた。(詳細は、藤野達也教授著「介護人材の確保・ 定着の促進—介護ロボット活用状況調査と千葉介護ロ ボットフォーラム報告書―」を参照)。また千葉市選 挙管理委員会との連携では、小学校での模擬投票にお いて、学生が候補者役を務めるなど、選挙啓発活動を 取り組んだ。

酒々井町との連携では、本学学生が若年層をターゲットに発行している広報誌「広報ニューしすいYoung Eyes」の編集委員となり、広報誌の取材や編集に関わった。 (文責:矢尾板俊平)

また看護栄養学部栄養学科では、自治体との連携事業については、平成29年度から行っている「みよし野菜ブランド化推進事業」(埼玉県三芳町観光産業課)をはじめ、「加曾利貝塚における縄文期の食生活形態に着目した機能性食材に関する研究」、「食による地域イノベーションに向けた縄文期食材を活かした新たな食材開発の検討」(千葉市教育委員会、加曾利貝塚博物館)、「マタニティクラス・沐浴教室」(千葉市中央保健センター健康課)、「高校生のための妊孕性啓発リーフレット作成の協力」(千葉市健康支援課)等、大学との包括連携協定の枠組みにおける連携事業を行った。また、平成31年度に本格的に活動を行う、酒々井町の町制施行130周年の連携事業に、栄養学科として着手した。(文責:岡澤順)

(2)企業、経済団体、NPO団体等との産学連携事業 について

千葉キャンパスでは、包括連携協定を締結している 千葉県松戸市の常盤平団地や千葉市の生実町町内会の 取り組みに学生が参画している。千葉キャンパスの近 隣地域である白旗地区では、白旗町内会と白旗商店会 とともに「白旗七夕祭り」を主催した。またJR蘇我 駅周辺地区まちづくり協議会の分科会である「Let's enjoy そが」に参画し、学生が「もっともっとそがま ちジェフいろプロジェクト」や「ジェフかざぐるまプ ロジェクト」に参加した。さらに、千葉市若葉区で本 学の学生がこども食堂の活動を行った。(活動の詳細 は、伊藤千尋准教授による「活動報告:「TSUGA no わ」ゼミ〜淑徳大生が企画・運営するこども食堂 Part II 〜 「を参照。)

佐倉市弥富地区のまちづくり協議会である「ふるさと弥富を愛する会」との連携では、2018年度は地域の公共交通に関する意見交換会(佐倉市、ふるさと弥富を愛する会等)に参加した。

プロスポーツチームとの連携では、千葉ロッテマリーンズとは「淑徳大学スペシャルナイター」の開催、千葉ジェッツとは「淑徳大学PRESENTS(千葉ジェッツVSアルバルク東京)」の会場で学生が活動を行った。

2. 埼玉キャンパス

三芳町ならびに西みずほ商店会においては、「企業 経営研究」「観光経営学入門」等の正課内科目、正課 外での行事 (祭礼等) への協力体制が確立している。 そのほか埼玉県内では、ふじみ野市、所沢市、川越市 (川越観光協会)、越生町、横瀬町、和光市が、正課内 での連携や学生インターンシップ、道の駅連携事業 (国土交通省関東地方整備局)、教員の委員委嘱などで 協力関係にある。オリパラ関連の行事では埼玉県庁・ 三芳町と連携がある。特に女子柔道部は三芳町がオラ ンダの柔道ナショナルチームのホストタウンになった 関係で、合同合宿練習を行っている。また、埼玉県 庁、東京都庁、釜石市(岩手県)、小国町(山形県)、 所沢市、ふじみ野市等の観光関連の審議会・環境審議 会・社会教育委員会議等の委員委嘱をうける教員もい る。委員の委嘱などは属人的な面が強く、キャンパス 全体の地域連携にはつながりにくい。また、学生教職

員ともに連携形態事業が広がるに従って、交通費等の 負担がかさむなどの問題がある。学生も交通の便や交 通費の点で、地域連携事業に二の足を踏むことがあ る。学生の経済状況の悪化、講演会等の謝礼の減額・ コミュニティカレッジ事業の予算打ち切り(三芳町) 等の経費問題は、連携事業にじわじわと効いてくるで あろう。 (文責:岩村沢也)

(1) 自治体との連携事業について

埼玉キャンパスが所在する三芳町とは、「子ども大学みよし」、「淑徳大学コミュニティカレッジ」、「みよしまつり」等の取り組みに参画している。また富士見市とは、「子ども大学ふじみ」、「子どもスポーツ大学ふじみ」に実行委員長と学生ボランティアを派遣している。

埼玉県内では、横瀬町での国土交通省関東地方整備局主催道の駅連携事業において、平成27年度から果樹公園あしがくぼ道の駅(横瀬町)と授業(演習)を通じた連携を行っている。平成30年度では学生が横瀬町の山道および秩父巡礼路をくまなく歩き、レポートをまとめ、また地図上で問題点を指摘するなどして、道の駅への歩行観光客の誘導を提案した。教育学部では三芳町・富士見市を含めた近隣市町村の小学校・幼稚園、特別支援学校、特別支援学級でのフィールドスタディを実施している。さらに埼玉県の大学開放授業講座(リカレント教育)では、H30年度は、前期15科目、後期15科目を開放。前期42名、後期45名の埼玉県市民が本キャンパスで受講した。さらに所沢市生涯学習推進センター主催の市民講座に教員を派遣した。

(2) 企業、経済団体、NPO団体等との産学連携事業 について

東武鉄道株式会社、石坂産業株式会社と連携した授業を展開している。また、公益社団法人小江戸川越観光協会、鶴瀬西口商店会連合会、西みずほ台商店会、三芳町協働のまちづくりネットワークとの連携・協働を通じた教育活動・地域貢献活動に取り組んでいる。 観光関連では、各種企業にインターンシップ学生を派遣している。

3. 東京キャンパスの取り組み

東京キャンパスの人文学部は2014年4月の開設から

5年目を迎え、地域連携や社会連携への取り組みが徐々に広がっている。地域連携については、これまでに短期大学部とボランティアセンターに蓄積しているノウハウを共有しながら、学科の専門性や教育目標のうえで優先順位の高い取り組みから段階的に進めている。歴史学科では、教職課程を履修している学生向けに教職志望者に望ましい経験が積める正課外活動、そして学科の強みであるフィールドワークを地域内で行える正課科目が大きな柱になっている。この中では、板橋区教育委員会、板橋区立郷土資料館が主要な窓口になっている。一方、表現学科では、企画、取材、原稿執筆、動画制作、声を使った表現など、学科の専門性を発揮できる内容を、ゼミ単位もしくは正課科目のPBLとして実施している場合が多い。

また、企業との産学連携については、おもに表現学科の教員が個別に開拓した連携先企業との単発のPBLとして取り組まれることが大半である。連携先開拓や調整業務の負荷が大きいうえ、継続的な取り組みになりにくい課題があるため、他キャンパスでの運用を参考に組織的・継続的な取り組みへの展開を検討していくことが望まれる。

(1) 自治体との連携事業について

- ① 板橋区、八潮市と継続している連携事業 包括連携協定を結んでいる板橋区、八潮市との間 で継続している以下の事業を実施した。
- ア 学習支援ボランティア (板橋区教育委員会)

5月に説明会を開催し、歴史学科の教職課程の履 修学生を中心に参加登録がなされた。

年間で延べ80名が活動に参加した。

イ 認知症サポーター養成講座(板橋区おとしより保 健福祉センター)

短期大学部との共催で11月に開催し、歴史学科の 教職課程の履修学生の「介護等体験」の事前学習と 連携した。

- ウ 八潮こども大学(八潮市) テーマ「比べてみよう昔の暮らし」で12月に開催。
- ② 専任教員による地域連携(正課科目、ゼミ) 歴史学科では、正課科目「歴史調査実習 I 」「博 物館概論」において板橋区立郷土資料館と連携した 実習を実施したほか、「日本地域史」で板橋区公文 書館での調査研究と板橋区内でのフィールドワーク

を行い、その研究成果を人文学部研究論集に論文としてまとめた。また、「教職概論」では板橋区役所・都市農業係と連携した農業体験を実施し、その成果を地域連携センター年報に掲載した。(研究ノート「東京都板橋区役所・都市農業係と連携した淑徳大生の農業体験による気づき」)

表現学科では、正課科目やゼミ活動の中で学生が 企画・制作を行うものを中心に地域連携を進めてい る。2018年度は、高齢者特殊詐欺防止ポスターの企 画・制作とキャンペーン参加(志村警察署)、板橋 区内のイベントでの学生スタッフの参加(板橋区文 化・国際交流財団)、訪日外国人向けの冊子を企画・ 制作(区役所や国際交流団体配にて配布)を実施し た。

③ その他

板橋区から学生参加の協力要請のあった案件として、食品ロスを減らすためのPR動画の企画・制作、 板橋区MOTENASHIプロジェクト(区内の他大学 の学生とともに半年間のPBL) にそれぞれ学生が 参加した。

(2) 企業、経済団体、NPO団体等との産学連携事業 について

コミュニティ政策学部で産学連携の実績があるキリンビバレッジ(株)との間で、地域のスーパー(オオゼキときわ台店)を巻き込んだ三者協働プロジェクトを実施した。このプロジェクトでは、表現学科の学生が近隣スーパーの視察を経て制作した広告POP案を11月の大学祭で展示し、来場者による一般投票と試飲会を通じて、学科の専門性をいかした地域との接点づくりをはかった。この一連の取り組みについて地域連携センター年報に掲載した。(研究ノート「飲料メーカーおよび近隣スーパーとの協働によるPBL ―キリン『午後の紅茶』広告POPコンテストを通じての地域参加一」) (文責:杉原麻美)

(活動報告)「TSUGA noわ」ゼミ

〜淑徳大生が企画・運営するこども食堂 Part II 〜 淑徳大学総合福祉学部社会福祉学科 鹿島捷吾 伊藤千尋

2019年3月22日、「TSUGA noわこども食堂」を主催する田中照美さん(千葉市若葉区/社会福祉士)にご協力いただき、淑徳大生(手話サークルたんぽぽ12名)が企画・運営する「こども食堂」を開催した。この企画が立ち上がるきっかけとなったのは、昨年度より、定期的に「TSUGA noわ」こども食堂にボランティアに参加していた学生たちと主催者である田中さんが交流を深める中で、「聴覚障がい」というだけで障がい者扱いされることは普通なのか。子どもたちがマイノリティになる体験はできないかと話があがったことにある。

これまで大学の手話サークル、メンバー同士で手話を学んできた学生たちは、自分の生まれ育った地域で自宅開放型コミュニティハウス「Tree House」を運営し、「支援をつくり出す」田中さんの考えに賛同し、子どもたちが手話に囲まれた環境を作りたいと、今回の企画が生み出された。

当日は地域(千葉市若葉区)の子ども31名、大人9名、淑徳大生を含むスタッフ13名、計53名が参加した。学生は、役割分担、安全確保、レクリエーションの準備等、春休み中に自主的に行った。参加した学生たちは、子どもたちと一緒に「つくる・食べる・遊ぶ」体験を通して、言語コミュニケーションだけに頼らず子どもと関わり、子どもたちはマイノリティの体験をすることができたようである。終了後の振り返りの中で、全員が「楽しかった」と、そして子どもたちへの「感謝」を言葉にする学生が多く、「感恩奉仕」の精神を体験的に学ぶ機会となった。また、子どもと耳の聞こえない学生との間で手話や言語ではないコミュニケーションが新たに生み出されていたこともわかった。今後も継続的にこども食堂に参加しながら、今回の気づきを深めていきたい。

今回、学生たちにアクティブラーニングの機会を与えてくださった田中照美さん、地域の皆さまに心から感謝申し上げたい。以下は、田中さんより寄せられた講評である。

この度は大学生が企画し運営するこども食堂 「第3回TSUGA noわゼミ」にご協力いただき、 ありがとうございました。日常生活の中ではほと んど交わることのない、別々のタイムラインで過 ごしている「大学生」と「小学生」ですが、この 企画を通して両者がお互いに得られるものは計り 知れません。特に今回は「手話」というコミュニ ケーションツールに初めて出逢った子どもたちも 多く、学生さんたちが企画し用意してくれた、 ジェスチャーゲーム、手話と寸劇の紙芝居、そし て手話ソングに目を輝かせながら参加していた様 子に感激しました。子どもたちの方からも積極的 に耳の聞こえない学生とコミュニケーションを取 る姿も見られ、今後もこうした取り組みが続けて いけるとありがたいなと感じています。学生さん たちにとっても、今後の学生生活や社会への一歩 を踏み出す自信に繋がってくれることを願ってい

「TSUGA no わ こども食堂」主催 田中照美(社会福祉士)





平成30年度 淑徳大学と千葉市との連携事業の整理

H30年6月1日現在

	☆Ľ 4·ロ		, ,
	新規継続	取組内容	担当課
1	継続	【中央区のまちづくりに関する協働・参画】 中央区におけるまちづくりや地域の課題解決、地域活性化の取り組みにおいて、 協働・協創を進める。特に、中央区内の地域運営委員会の活動を支援するため、 淑徳大学が有する資源(人的資源、学術研究の成果)を活用しながら、地域・ 行政・大学の連携を通じた地域マネジメントモデルの構築を進める。	中央区地域振興課市民自治推進課
2	継続	【パラスポーツ講座・交流会の開催など共生社会の実現に向けた取組み】 今後、共生社会の実現を目指し、東京2020オリンピック・パラリンピック競技 大会を契機に、これまでスポーツに親しむ機会の少ない障害者のスポーツへの 参加機会の拡大や、互いの理解を深めるために障害のある人もない人もともに スポーツに親しむ機会の創出、競技普及の担い手育成などについて、さらなる 連携を図る。	
3	継続	【介護人材の確保・定着の促進】 今後想定される介護人材の不足を補うため、介護ロボットの普及や外国人人材 の活用など様々な施策を推進することとしている。そこで、これらの施策につ いての普及啓発として、淑徳大学の有する介護分野に関する豊かな知見を活用 し、大学講師による先進的な取組みに関する講演をはじめ、介護人材の確保・ 定着に向けた連携を進める。	介護保険管理課
4	継続	【看護・介護・福祉分野等における新製品開発の促進】 今後、高齢化の進展に伴い需要が増大することが想定される看護・介護・福祉 分野で活用される機器は、ハンドメイドで製品化されるものから、最新のロボット技術を活用し上市されるものまで多様に渡る。地域経済活性化のため、ユーザー目線に立って、この分野に参入しようとする開発メーカーに対し、看護・介護・福祉に総合的な知見を持つ淑徳大学が助言等を行うことで、開発期間の短縮化や、製品の利便性向上を狙い、淑徳大学と市及び財団で連携を進める。	産業支援課
5	新規	【食品関連事業者と連携した新商品の開発】 千葉市内及び近隣地域では、様々な農林水産物が生産されており、地域経済活性化と地産地消の推進のため、これらの地場産品を活用して食品開発を進める事業者と、栄養学の権威である淑徳大学の連携による新しい食品、新しいメニューの創造を狙い、淑徳大学と市で連携を進める。	産業支援課
6	継続	【千葉の親子三代夏祭りにおける学生ボランティア】 平成27年度から、学生ボランティアに千葉の親子三代夏祭りの各種イベントの 運営を補助してもらっている。 平成30年度からは、夏祭り当日のボランティアだけではなく、企画段階から継 続的に夏祭りの運営に参画してもらうことを検討している。	市民自治推進課
7	継続	【生活困窮世帯等に属する中学2年生及び3年生に対する学習支援】 平成23年度から千葉市教諭OBや学生ボランティアの協力のもとに生活困窮世 帯等を対象に、生活困窮者自立支援法に基づき、高校進学に必要な基礎学力を つけること等を目的として無料の学習支援事業を行っている。 同事業の申込者数は、事業開始から大幅に増加しており、また、きめ細かい学 習支援を行うためには学生ボランティアによる更なる協力が必要であるため、 ボランティアの派遣協力を求める。	保健福祉局保護課
8	新規	【妊孕性についての周知】 若い世代がライフデザインと健康を考える際の一貫として、妊孕性について正 しい知識の周知への協力をお願いする。 1) 在学生に対する講演会を実施する場の提供 2) 成人式に配付している妊孕性周知のためのリーフレットを見直すための意 見聴取 ※妊孕性(にんようせい)とは:妊娠のしやすさのこと。加齢とともに低下す るとされている。	健康支援課

	新規	取組内容	担当課
9	新規	【事業所内保育事業又は企業主導型保育の設置、運営】 組織の人材確保やダイバーシティー、ワークライフバランスの推進モデルとして、保育士養成校としての資源を活かし、事業所内保育事業又は企業主導型保育を学内又は隣地に設置していただくとともに、地域枠の設定により待機児童解消を促進していただく。本市からは、事業所内保育事業の設置、運営に助成するとともに、各区において、市民に対して地域枠のあっせん、紹介を行い、事業運営を支援する。	幼保支援課
10	新規	【企業向け研修の開発及び企業への周知方法検討】 平成28年度から市内の中小企業の人材育成を図り、もって市の産業の振興に寄与することを目的として、中小企業者の経営者又はその従業員が業務に必要な技術、技能又は知識の習得を図るために必要な各種研修制度を利用した市内の中小企業者に対し、その経費の一部を補助する「千葉市中小企業研修費補助金事業」を開始した。補助対象となる研修の一つとして、「市内大学が実施する企業を対象とした在職者向け研修」を挙げていることから、企業向けの研修を開発していただき、市内中小企業の利用を促進したい。また、企業への周知方法にも学生のアイデアを活用したい。(チラシのデザイン作成など)	経済企画課 雇用推進室
11	継続	【Let's enjoy そがへの参加】 平成23年度に発足した地域の住民や企業、ジェフ及び千葉市で構成される「ホームタウンを話し合う会(JR蘇我駅周辺地区まちづくり協議会の分科会)」に平成26年度より淑徳大学が参画。平成27年度に名称を「Let's enjoy そが」に変更し、地域で取り組むイベント(かざぐるまプロジェクト、ラジオ体操キャラバン、ジェフカラー化等)を連携して実施。今後もこれまでの取り組みを実施するとともに蘇我を盛り上げるためのイベント等を検討していく予定であるため、参加をお願いする。	市街地整備課
12	継続	【「緑と水辺の基金」事業における連携】。 寄附付自販機の設置・基金パンフレット等広報物の配布など、基金の募金・広 報活動において出来る範囲での連携をお願いする。 (「ちょいサポ宣言」「募金箱デコり隊」)	緑政課
13	継続	【中央区における運動イベントへの協力】 保健師等の育成のため、市では学生実習を受け入れている。淑徳大学は中央区内の大学であり、地域主体で行われる運動イベントに、学生のアイデアや協力があると、更に充実したものになると考えると思われるため、協力をお願いする。	中央区健康課
14	新規	【美浜ステイ・プロジェクト事業】 平成28年度に設立した区職員有志と敬愛大学ボランティアサークルIrisによる MMMPT (みんなで・みはまを・もりあげようプロジェクトチーム) 実行委員会を主軸として、地域活性化に関心を持つ地域の団体 (学生・企業等)を巻き込みながら、各種イベントを企画立案・実施し、美浜区のブランド力向上を目指しており、本事業への参加をお願いする。(平成28年度実績)自主研修グループでの活動として、12月にイルミネーション点灯・アカベラコンサートを開催し、学生にはポスター作成・近隣店舗への協賛金依頼・当日の運営業務等に携わってもらった。(平成29年度予定)今年度より予算を確保し正式に事業として立ち上げ。引き続き、地域活性化に関心を持つ地域の団体に様々な形での協力を仰ぎながら、企画を立案・実施していく。《4月時点実施予定(案)》①浜辺PRイベント(稲毛海浜公園・展示企画と飲食ブース出店・10月下旬~11月上旬)②若者まちづくりワークショップ(区内高校、大学生を対象・地域活性化施策の検討をテーマ・12月頃)③イルミ浜・アカベラコンサート(高洲コミュニティセンター・イルミネーション点灯・11月下旬~12月末)④美浜PR動画(大学生との協働により外国人観光客を対象としたPR動画制作・時期未定)他	美浜区地域振興課
15	新規	【スクールソーシャルワーカーの受け入れ】 SSWの職務について学ぶ場を提供するとともに、本市学校教育を担う育成に 当たるため、福祉関係について学ぶ学生のスクールソーシャルワーク実習を、 教育支援課及び教育センターや養護教育センターにおいて受け入れている。	教育支援課

	新規 継続	取組内容	担当課
16	継続	【養護教育センターが実施するサポート活動への学生ボランティア参加】 大学を通じて、養護教育センターのグループ活動や学校生活サポート事業の学 生ボランティアを募集している。 長柄ハッピーキャンプの宿泊体験行事にも学生ボランティアが同行している。	養護教育センター
17	新規	抱っこや沐浴の方法について教員が説明をした後、実際に抱っこや沐浴の体験	支援課 千葉市中央保健福祉センター

平成30年度 淑徳大学と酒々井町との連携事業の整理

H30年6月1日現在

	新規継続	取組内容	担当課
1	継続	まちづくり活動の取り組みや町の魅力について、町民や若い目線で新たに情報発信していくことを目的として発行している「広報ニュー しすいYong Eyesの」の編集委員として、学生が参画している。(H29年年度~)	企画財政課 広報広聴班
2	新規	商工会夏まつり 学生のイベント参加。誘客に向けた改善等報告。	経済環境課 商工観光班
3	継続	酒々井・千葉氏まつり 学生のイベント参加。誘客に向けた改善等報告。	経済環境課 商工観光班
4	新規	酒々井町ふるさとまつり及び酒々井新酒祭り 学生のイベント参加。誘客に向けた改善等報告。	経済環境課 商工観光班
5	新規	酒々井町観光実態調査 調査方法については、酒々井町と協議中。	経済環境課 商工観光班
6	新規	「しすいふるさと読本」&「酒々井の百話」(130th記念事業) 酒々井町誕生130年を記念し、絵本の作成や、一般向け昔話、モニュメント作成、酒々井の100話、AR、史跡マップの作成、酒々井の地域色を活かした町づくりなど、103th記念事業の企画運営実施に参画する。	

平成30年度 淑徳大学(埼玉キャンパス)と自治体との連携事業の整理

平成30年度(平成30年4月1日~平成31年3月31)

	新規 継続	取組内容	担当課
1	継続	【子育て応援プログラム】 教育的学習ボランティア(幼児教育コース)内容:幼稚園、保育園、認定こども園の教育・保育補助を行う。子どもたちの変化を観察したり、配慮を要する乳幼児の支援など教職員の手伝いをしたりしながら学ぶ。市立子育て支援センターでの事業協力 ①7月「たなばた集会」②3月「ひなまつり会&おたのしみ会」	富士見市保育課
2	継続	【子ども大学☆ふじみ推進事業】 市民活動団体等との連携のもとに、その教育資源を活用しながら、子どもの興味を引き出し、想像力の創造学習や体験学習を実施する。子どもの育成に地域、学校及び行政が連携して取り組む。 実施期間は6月~9月、全7回。 対象は市内在住の小学4年生から6年生までの60名	富士見市教育委員会生涯学習課
3	継続	【子どもスポーツ大学☆ふじみ推進事業】 市民活動団体等との連携のもと、社会人、大学生等スポーツで活躍する選手等 を講師として招き、講座を通じて「心」「技」「体」を学ぶ。 実施期間は6月~9月、全7回 対象は市内在住の小学4年生から6年生までの30名	富士見市教育委員会生涯学習課
4	継続	【まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会】 富士見市まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会において、富士見市創生総合 戦略の検証を行う。任期:平成29年4月~31年3月	富士見市政策企画課
5	継続	【青年の家跡地等整備推進会議】 青年の家跡地の活用、びん沼自然公園の活用、川の国埼玉はつらつプロジェクトの整備内容などに関する事項について意見交換を行う。 任期:平成29年7月~令和2年3月	富士見市政策企画課
6	継続	【社会教育委員会議】 社会教育に関し教育委員会に助言するため、社会教育に関する調査研究を行い、 意見を述べる会議を開催する。	富士見市生涯学習課

平成30年度 淑徳大学(埼玉キャンパス)と自治体との連携事業の整理

平成30年度(平成30年4月1日~平成31年3月31)

	新規 継続	取組内容	担当課
1	継続	【子ども大学みよし】 地元企業等との連携のもとに、その教育資源を活用しながら、子どもの興味を 引き出し、想像力の創造学習や体験学習を実施する。子どもの育成に地域、学校及び行政が連携して取り組む。 実施期間は6月~11月、全5回。 対象は町内在住の小学4年生から6年生までの40名	三芳町立中央公民館
2	継続	【みよしまち夏休み探検隊】 学生(教育学部)によるキャンパスツアー、ゲームをして遊び、地域の子どもたちとの交流を図る。子どもたちの体験活動を推進し、夏休みを有意義なもにする。 実施:8月1回 対象は町内在住の小中学生30名 参加児童17名 学生10名 大学関係者7名。	三芳町 生涯学習課
3	継続	【三芳中学 総合的な学習の時間(地域を知る)】 地域の大学を知ることにより、地域の教育や施設に興味を持ち、今後の自身の キャリアに役立てる。(キャンパスツアー、授業見学、学食体験等) 実施:7月の2日間 対象は三芳中学1年生25名	三芳町立三芳中学校

	新規維続	取組内容	担当課
4	新規	【ホストタウンPR事業】 三芳町ホストタウン交流推進実行委員会と連携し、三芳町がオランダのホストタウンであることを淑徳祭にてPR及びサポーターの募集を行った。(ブース設置) 10月22日(土)、23日(日)	三芳町政策推進室
5	新規	【オランダ女子柔道チームウェルカムパーティー】 オランダ女子柔道チーム来日時に三芳町ホストタウン交流推進実行委員会と連携し、住民等を交えたウェルカムパーティーを実施。 12月2日(日)	三芳町政策推進室
6	新規	【オランダ女子柔道チームトレーニングキャンプ】 オランダ女子柔道チームトレーニングキャンプ 12月2日 (日) ~12日 (水)	政策推進室
7	新規	三芳町まち・ひと・しごと創生総合戦略の成果検証等を実施する 3月22日(金)	政策推進室
8	新規	【交通安全教育技能コンクール】 東入間警察署の依頼により、三芳町代表として交通安全の発表を行った。平成 31年2月15日開催 パネルシアターサークルPITAPETA (学生2人)	自治安心課
9	継続	【第28回みよしまつり】 経営学部の「ボランティア研修」として学生を受け入れている。平成30年度は、学生24名が、実行委員会のボランティアスタッフとして事務や当日の運営、片付け等に参加した。 6 月~ 10 月	自治安心課
10	継続	【協働のまちづくりネットワーク運営委員会】 協働のまちづくりネットワーク(条例に基づいた住民と町が対等の立場でまちづくりを推進する組織)では、5つの分野グループが魅力あるまちづくりのために活動をしている。複運営委員長として駒崎准教授が参加。	自治安心課
11	継続	【協働推進会議】 住民、公益団体等多様な主体と町との協働によるまちづくりを計画的かつ効果 的に推進することを目的としている会議で、年1回開催されている。平成29年 3月1日~平成31年2月28日	自治安心課
12	継続	【認知症サポーター養成講座】 認知症についての基本知識や、認知症の人との接し方などを学び、認知症の人 とその家族を支えるサポーターを養成する講座。「社会構造と社会変動」の講 義の一環として実施。実施日:平成30年12月21日 対象者:淑徳大学学生 参 加人数:31名	自治安心課
13	継続	【町立子育で支援センター「なかよし講座」】 平成31年2月21日に開催した「なかよし講座」講師としてお招きした。講座名:「パネルシアターを楽しもう」	子ども支援課
14	継続	【緑化推進会議】 本町の緑化推進及び緑地保全に関する事項について、町民・事業者・行政が相 互に連絡調整を行い、協議する会議。	環境課
15	新規	【緑のトラスト保全第14号地ネイチャーイベント】 緑のトラスト保全第14号地が一般公開(平成30年4月)となり、地域住民への PRとともに、子どもから大人までが自然に親しみ、地域の魅力を再発見する ことを目的とした体験型イベントを開催。	環境課
16	継続	【世界一のいも掘りまつり】 9月に町内(上富)で開催される世界一のいも掘りまつりに、実行委員・スタッフとして教育学部の学生が参画。	観光産業課
17	継続	【教育に関する事務の管理及び執行の状況の点検・評価に係る学識経験者意見 聴取会】 点検・評価における意見聴取会を開催した。(8月24日、9月27日、11月12日)	教育総務課
18	継続	【三芳町みらい&のぞみサマー・チャレンジ・スクール!】 町内小学校3年生~6年生の児童を対象に補習学習等を実施。	学校教育課

	新規 継続	取組内容	担当課
19	継続	【三芳町みらい&のぞみサマー・チャレンジ・スクール!】 町内小学校3年生~6年生の児童を対象に補習学習等を実施。	学校教育課
20	新規	【「未来を生き抜く人財育成」学力保障スクラム事業】 埼玉県から委嘱を受けた藤久保小学校において、児童を対象に補習学習を実施。 授業中等による補習学習、個別支援 平成30年6月~2月	学校教育課
21	継続	【フィールドスタディー】 町内全小学校において、学生が教育実習を行うとともに、児童への支援を実施。	学校教育課
22	継続	【コミュニティスクール】 町内全小・中学校においてコミュニティースクールを実施するための推進委員 会の実施。	学校教育課

平成30年度 淑徳大学と【板橋区等】との連携事業の整理

平成30年度(平成30年4月1日~)

	新規 継続	取組内容	担当課
1	継続	【歴史学科:八潮こども夢大学での体験授業の実施】 昨年度と同様に歴史学科の教員・学生によって、12月頃に「比べてみよう昔の暮らし」等のテーマで開催した。 (活動内容は、ボランティアセンター年報に掲載)	八潮市 学校教育部 指導課 指導係
2	継続	【歴史学科:正課科目「歴史調査実習 I 」における地域連携】 板橋区立郷土資料館の協力を得て実習を実施。	板橋区立 郷土資料館
3	継続	【歴史学科:教職課程を履修する学生による学習ボランティア】 教職課程を履修する学生が、板橋区教育委員会と連携して、学習支援ボランティアに登録し、派遣を要請する小中学校で学習支援を行う。 板橋区教育委員会の梶原令子先生より、学習支援ボランティアについての説明があり、説明会に参加した学生は、学習支援ボランティアに登録した。説明会は、5月8日12:30~12:55に731教室で開催した。 (活動内容は、「ボランティアニュース」Vol.61 に掲載)	板橋区教育委員会 板橋区教育センター
4	継続	【歴史学科:教職実習後の教育実習成果報告会】 「教育実習成果報告会」(「教育実践演習」、「教育実習事前事後指導」の発表報告会)を開催。板橋区教育委員会の先生をお招きし、歴史学科第2期生が発表し、教育実習を希望する学生が来年度以降の教育実習の事前学習を行う。	
5	継続	【板橋区 認知症サポーター養成講座】 板橋区内の認知症の高齢者をサポートする活動を支援する講座を開催。 人文学部は、教職課程を履修する学生の「介護等体験」の事前学習を目的として参加。 本年度は、11月に実施。 (人文学部・短期大学部共催) (活動内容は、「ボランティアニュース」Vol.61に掲載)	板橋区 おとしより保健福祉センター
6	継続	【歴史学科:正課科目「博物館概論」における地域連携】 14回目の授業で板橋区郷土資料館に調査に行き、その結果をブログ等で情報発信した。	板橋区立 郷土資料館
7	継続	【歴史学科:正課科目「日本地域史」における地域連携】 板橋区板橋宿地域を対象とし地域史研究を実施。板橋区公文書館での調査研究 を行うなど、板橋のフィールドワークを行った上で、学生が報告書をまとめ、 その成果を教員が『淑徳大学人文学部研究論集』第4号に論文としてまとめた。 調査日程は次の通り。 4月27日(金) 板橋宿地域のフィールドワーク、6月1日(金) 板橋区公文 書館および板橋宿地域のフィールドワーク。	板橋区 公文書館

	新規 継続	取組内容	担当課
8	継続	【歴史学科:教職科目「教職概論」の正課外における地域連携】 赤塚支所・都市農業係並びに板橋区農芸指導員の会と連携して、年間6回、約 10名の淑徳大生が農業体験に従事し、貢献している。主な活動は、じゃがいも の種イモづくり、じゃがいも植え、親子じゃがいも収穫体験、大根・人参の種 まき、板橋区農業まつりなど。	赤塚支所
9	継続	【表現学科:板橋区文化・国際交流団体が主催するイベントでの学生スタッフの参加】 白寄ゼミで平成28年度より下記のイベントにおいて、学生がスタッフとして参加。 ・ふれあいステージ 8月3日(土)、4日(日) 影アナウンス・動画撮影及び編集 ・フレッシュコンサート 9月9日(日) 影アナウンス ・外国人スピーチ大会 2月23日(土) 司会・講評・運営 毎回参加者からも高い評価を得ることにより、学生の経験知が想像以上に増している。また、社会貢献を意識する機会にもなった。	公益財団法人 板橋区文化·国際交流財団
10	継続	【表現学科:志村警察署と連携しての特殊詐欺防止の企画立案】 白寄ゼミで平成28年度より参加。平成30年度は以下を実施。 ・特殊詐欺防止キャンペーンに向けてのキャラクター・チラシ制作及び キャッチコピー提案 ・キャンペーン時の呼びかけ及び、グッズ配布 毎年、柔軟な思考力・創造力から生まれるキャラクターは高評価を得ている。 板橋区のみならず、東京都全域で使用されることになった。キャラクター使用 の際は、必ず大学名も載せることが条件となっている。	警視庁 志村警察署 防犯係
11	新規	【表現学科:板橋区資源環境部資源循環推進課と連嶺し、学生が食品ロスを減らすための動画 CM を作成】 平成30年8月より平成31年3月まで、学生が動画2本を撮影。構成・シナリオ制作・撮影・アテレコ・編集など全て学生が担当。板橋区役所内 TV、板橋区役所 SNS などにて3年にわたって公開される。エンドロールには、大きく板橋区役所と淑徳大学のロゴが並ぶ。	板橋区資源循環推進課
12	新規	【表現学科:板橋区資源環境部資源循環推進課よりナレーション依頼】 平成30年8月に既に完成している板橋区の動画にナレーションを入れた。	板橋区資源循環推進課
13	新規	【人文学部:板橋区「MOTENASHI(もてなし)プロジェクトへの学生参加】 板橋区を誰もが住みやすい地域にするために大学生の視点からの提案をまとめていくプロジェクト。東京家政大学と淑徳大学の学生が参加し、テーマ別に3つのチーム(外国人サポートチーム、子育て支援チーム、グルメ・観光チーム)に分かれ、半年間で10回にわたるワークショップを開き、具体的な提案を議論した。2月21日に板橋区役所で成果発表会が開催され、その際の様子が日本経済新聞2019年3月20日(水)で紹介された。	板橋区総務部人事課 人材育成係

Ⅲ. 受託事業

1. 千葉市こども若者市役所



「千葉市こども若者市役所」では、千葉市が取り組みを進めているこども若者の社会参画事業の一環で、若者が自分たち自身の「社会的な影響力」を知り、自らが当事者となり、主体的に地域や社会の課題解決に取り組むことができる仕組みづくりを進めている。

2018年度の主要テーマは「こどもの居場所づくり」と「地域での世代間交流」の2つを設定した。



「こどもの居場所づくり」と「地域での世代間交流」というテーマに、「高校生」や「大学生」ができることを掛け合わせた結果、それぞれ「高校生や大学生がこどもたちに「教える」「伝える」「体験する」」ということと、「市内の大学や短期大学、高校の施設を活用し、地域との交流スペースを高校生と大学生で運営する」という活動の方向性が見出すことができた。この方向性に基づき、活動をどのように具体化できるか、参加者自らが様々な「仮説」を立てながら、その方法を検討した。同時に、すでに千葉市内で取り組まれている事例を知るために、千葉市動物公園に隣接するプレーパーク「子どもたちの森公園」にフィールド

ワークに行き、体験を行うなどをした。

次に、デザイン思考に基づき、自分たちが考えた仮説についての実証実験を行うため、千葉経済大学の学生ホールをお借りして、12月22日(土)に「クリスマスカフェ」を開催した。当日は、200名を超えるこども、大人、学生が参加し、予想を超える来場者となった。また、用意した企画もこどもたちにも喜んでもらえ、こどもの居場所づくりにおいても有効な企画であることが確認でき、自分たちがこどもたちに伝えられることも改めて考えることができた。一方、運営にあたっては課題も多く残ったため、「経験の継承」が必要であると感じた。



実証実験の結果、大学、短大、高校の施設を地域に 開放し、地域の交流拠点にしていくことが有効である ことが確認できた。また、結果を振り返り、こどもや 若者の社会参画を進めていくためには、まず「知るこ と」、次に「やってみること」、それにより「自分たち の影響力を実感」し、「関心を持つ」という循環を創 り上げることが重要であるとの意見が出た。

さらに今年度は、「ヨコ」と「タテ」のつながりづくりを意識しながら、活動を行った。特に「ヨコ」のつながりでは、ちば産学官連携プラットフォームに参画する千葉市内、市原市内にキャンパスを持つ大学・短大の学生同士の「つながり」を生み出すことを進めた。普段は、異なる大学・短大で、異なる分野を学んでいる同年代の若者が集まり、交流することにより、新たな発見を得るとともに、自分たちだけではできないことができるようになるといった新たな可能性が広がった。

2. 笠間市「生涯活躍のまち公民連携による移 住・定住促進施策に関する共同研究」

本共同研究では、東京圏の企業等勤務者を対象に、 市が進める生涯活躍のまち構想を示した上での移住等 の意欲、意識調査をWEB回答方式で実施した。

質問項目は、①移住希望、②週末移住・二地域居住の希望、③住環境の選択、④自治体からの支援、⑤職場からの支援の5つの分野で構成され、それぞれ現在の意識と将来の意識について回答を得ることにより、移住等の促進のための課題や今後の施策への示唆を得ることができた。

アンケート結果から、東京圏の企業等勤務者が移住する際の課題は、交通アクセス、通勤 (職場との距離)、買い物の利便性などが挙げられた。また移住に対する自治体や職場からの支援としては、「通勤のための資金補助」や「家賃補助」などの金銭面でのニーズのほか、テレワーク等を活用した在宅でも仕事ができる環境の整備などが挙げられた。今後、地方創生事業、特に移住・定住促進においては、自治体だけではなく、企業側での「働き方」改革も重要となることが明らかになった。

またアンケート結果を踏まえ、東京圏の企業との ディスカッションも行い、さらなる課題抽出とインセ ンティブ設計に関して議論を行った。

淑徳大学地域連携センター年報 第3号

発 行 令和2年3月31日

編集責任者 矢尾板俊平

発 行 者 淑徳大学地域連携センター

〒260-8701 千葉市中央区大巌寺町200

電話043-265-7911

印 刷 (株) 正文社

〒260-0001 千葉市中央区都町1-10-6

電話043-233-2235